
黒伯爵の妃

紫月 香夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒伯爵の妃

【Nコード】

N3057Y

【作者名】

紫月 香夜

【あらすじ】

戦場では負け知らずという、常に敵を殲滅する魔将軍ガレリウド。彼が主君と仰ぐガレヴァーン侯爵から新たな命令を受ける。

強大な敵を迎え撃つ戦かと思っていたが、それは「妃を娶って子を為せ」という命令。

娶るまで戦場に行くことを禁じられ、憤怒していた所に一筋の希求の光が届く。

それは異世界からで、絶望の余りに自害しようとしていた人間の娘と出会う。

話すうちに興味を抱き、2000年ぶりに28番目の愛妾として初めて人の娘を娶る。
魔族と平安貴族娘の寵愛話。

設定

ガレリウド・グレイム

伯爵級の魔族。年齢は5000歳以上。

戦場では負け知らずで殲滅將軍、貴族の中では黒伯爵という通名を持つ。

黒髪、黒目、190?、90?、日焼けした浅黒い肌、筋肉質。魔法を使うより、武器を振り回す方が好きという生粋の軍人。

力だけなら公爵級の魔族であるが、爵位に興味がなく軍団を任される折に伯爵の爵位を授けられる。

愛妾を27人抱えているが、最後に27人目を迎えたのは2000年前。

主君であり師父にも当たる侯爵に妃を見つけて来いと命令される。

中宮香子

平安貴族の娘。年齢は19歳。

本名は橘香子。たけはなのかし

帝の側室になるべくして蝶よ花よと育てられる。

14歳で入内して帝の寵愛を受け中宮となって一女を産むが、後に帝が崩御し、内親王も病で亡くなる。

悲しむ間もなく、政略結婚に利用される身に絶望を覚えて自害しようとする。

黒髪、黒目、157cm、48kg。

のんびりおっとりした性格だが、言いたいことははっきり言うタイプ。

マデウス・ガレヴァーン

侯爵級魔族。年齢は3000歳以上と推定される。

戦場では鬼神と恐れられた魔將軍だが、老齡により前線は若い魔

族に任せて本陣で統率と命令を下している。

衰退気味と言いながら、力は計り知れず、配下を上手く動かす知将。

戦争孤児で生き残った当時少年魔兵とも言えるガレリウドの才を見出し、手元に置いて鍛え上げた。

白髪、紅目、187?、79?。

イグネルフ・シュサイア

子爵級魔族。年齢は4200歳ぐらい。

文官としての素養があり、戦場へ立つことはないが伯爵邸を守衛する長。

独身貴族を貫いており、気品に煩く、こだわりがとても強い。

金髪癖毛、青目、185?、77?。

琴式部

中宮香子の部屋付きの女房。年齢は32歳。

琴の名手であり、家事も、和歌の文才なども多才稀なる人。既婚済み、宮仕えに精を出して香子を心配してついできた。

口達者で心配性、他人にも自分にも厳しい。

黒髪、黒目、160cm、51kg。

エンデイリシカ

高位魔族の娘。ガレリウドの27人の愛妾のうちの一人。

戦場で魔法を駆使して闘うことが好き。

紅髪、紫目、180cmの長身ながらダイナマイトボディ。

高圧的で自信過剰、好戦的な性格をしている。人間を毛嫌いしている。

レヴィン・ローゼルグ

伯爵級魔族。ガレリウドと同等の地位にある。

戦場ではマデウスの後継とまで言われるほどの知將軍。

罨や計略を謀るのを得意としており、罨のためなら味方をも殺す冷徹な面も持つ。

濃茶髪、緑目、褐色の肌、188?、77?。

ルファイア・ネイ

公爵級魔族の娘。

ガレリウドの抱える27人愛妾のうちの一人。

魔力の生成力が極端に低く、供給しないと肉体が滅ぶため、ガレリウドが定期的に面倒を見ている。

かなりの猫かぶりで、嫉妬深い性格。

金髪、青目、童顔、150?、41?。

1・命令

その日、ガレリウド・グレイム伯爵は不機嫌を露わにしたまま、石畳の回廊に靴音をいつになく早足に響かせて歩いた。

回廊で話し込んでいた下級貴族や、伯爵とお近づきになると声をかけようとしていた貴婦人も、一様に怒りを帯びた様子に、只事ではない気配を察して道を開ける。

戦場に出ればガレリウドの後にはぺんぺん草すら何も残らないと有名で、ついた渾名は「殲滅將軍」だの、「黒伯爵」だのと呼ばれている。

ガレリウド自身、その渾名は好んでいないわけではない。

戦に勝ち続ける美德は、己が仕える閣下の戦功として認められるのだから。

全ては自分に戦の才能を見出し、引き出させて生きるための目的を与えてくれた師父のためなら、これからも戦勝をもぎ取って見せる。

そう、それがいつもの命令だった。

しかし、今日ばかりは違った。

豪華な扉の前までくると、衛兵が「謁見中です」というのも憚らず、押しつけ重い扉を半ば爆砕させる勢いで開けた。

ズガ　ン！！

響き渡る謁見の間は、粉塵を巻き上げて、怯えた先客の一本角を持つ男爵級の文官が飛び退いた。

粉塵を軽く払いながら、年老いた老爺が飄々とした笑みを浮かべて、一段高くなった台座の豪華な椅子に顎肘をつけて座っている。

彼の師父であるガレヴァーン侯爵、戦場では鬼神と呼ばれていたが、このところは隠棲気味の主君である。

「また派手に壊してくれたもんじゃのう。御主の財の使い方までケチはつけぬが、この扉の修理代にはかりかけておるようでは、妃を迎えるなど出来そうにないのう」

ガレヴァーン侯爵が手を翳すと、粉塵は消え失せる。

呑気な言葉にガレリウドは収まらぬ怒りを、近くにいた文官に向けて無言で散れと命ずる。

男爵級と伯爵では、明らかに伯爵の方が力が強い。

怯えた文官は、ガレヴァーン侯爵に頭を下げると逃げるように壊れた扉の隙間から這い出た。

「追い返さなくとも、御主が扉を壊したところで、会話は全て筒抜けであるう？」

からからと笑うガレヴァーン侯爵に対し、儀礼的に腰を折るものの、ガレリウドは不機嫌のままだ。

軍装の懐より手紙を取り出し、ガレヴァーン侯爵のテーブルの前に突き出す。

「閣下、単刀直入にお聞きしますが、これはどういうことですか？」

「どうということも何も、そのままの意味じゃ」

「冗談は寝るか死んでからにして頂きたい」

「死んだら孫の顔が見れぬではないか」

しれっとしてまだからかうガレヴァーン侯爵に、ガレリウドはプチットという音がしそうなほど血管を眉間に浮きだたせた。

その様子が面白かったのか、ガレヴァーン侯爵は長く立派に生やした顎鬚を撫でながら問う。

「御主は何人の愛妾を囲うておるのじゃったかのう？」

「……27人おりますが、閣下」

「そうじゃろう、そんなに抱えておるのに、不思議と子が出来ぬではないか」

「閣下が心配なさることではありません」

「心配ではない。ただ孫が見たいだけじゃ。愛妾ばかりで妃の一人も作っておらぬのは、御主だけだからのう」

はあつ、と深い溜息がガレリウドから漏れる。

27人の愛妾のうち、ガレリウド自身が惚れ込んで娶った女は居ない。

ガレヴァーン侯爵に無理やりあてがわれたり、戦場で孤児になった娘や、勝手についてきた戦好きの鬼女などが殆どだ。

彼女らを嫌うわけではない、面倒を見るといふ名目での愛妾。

彼女たちの間に何事もなかったわけではない。

身籠った愛妾も居たが、全て産まれる前に死んでいる。

殲滅將軍というのは、子どもも殲滅するのかと何度ガレヴァーン侯爵にけなされたことか。

ガレリウドがガレヴァーン侯爵から受けた命令は、妃を連れて後継者を見せろという、戦とは全く関係のない内容だった。

「御主が妃を連れぬなら、また妃候補の娘を宛がうしかないのう」

「なッ　！？　これ以上、厄介な愛妾など要りませぬ。連れて来れば良いのでしょうか、妃をっ！」

面倒は御免だとばかりに、フンッと息を荒げてガレリウドは身を翻した。

「三か月じゃ」

「は？」

「三か月以内に連れて来い。それまで、御主は戦場に出さぬ」
「閣下！」

横暴だ。

あまりにも、酷い仕打ちである。

戦で勝つことが喜びで、生きる意味であるのに、三か月も謹慎のような生活には身体がなまってしまふ。

翻した身を、またガレヴァーン侯爵に向けたが、もう取り合っ気はないとばかりに、手を振られる。

「ほれ、さつさと探るか愛妾を口説け。次の謁見がある。御主の予定ない謁見のせいで、今日の予定全てが狂ってしまうわい」

無然としながらも、儀礼的に一礼だけすると、ガレリウドは再び身を翻した。

2・希求

侯爵邸の謁見の間から退室し、回廊をまた早足で歩く。妃を作るとなると、相応に面倒なことになる。

ただでさえ27人の愛妾同士でも嫉妬や派閥がある。

住まいを分けて通うことで血を見る争いにはならないが、ここ数百年は様子を見る程度に訪れて回るだけとなっている。

魔族という長き生の中で、己に頼らなくとも独り立ちする愛妾も居るため、妃になりたいと虎視眈々と狙う愛妾と、戦場に連れてほしいという愛妾を適当にあしらうだけに通うだけだ。

妃にするなら、それらの気性激しい愛妾を黙らせるものか、動じないものでなければならぬ。

27人の愛妾の中から選ぶとなると、これまた鼻肩だのと厄介なことになりそうだった。

『 助けて 』

不意に声が聞こえた。

悲痛、諦観、絶望を秘めた声音。

戦場で縋るように紡がれる言葉と同じだが、込められた想いが憂いを帯びている。

どこに声の主が居るのかと、辺りを見渡したが、貴婦人の熱い視線と笑みが返ってくるだけで、見つからない。

空耳かと首を捻ったが、この侯爵邸で聞こえたわけではないようだ。

「黒伯爵殿。どうかしたのか？」

今度は目の前から声がかかる。

同じ伯爵級魔族のレヴィン・ローゼルグ。

戦場では策を展開して侯爵の有力な後継者候補とも呼ばれる知将。傍らには珍しく貴婦人を連れてくる。

淡いオレンジの色をしたドレスを着た若い娘で、目が合うと恭しくお辞儀をしてみせる。

「レヴィン……。こちらは？」

「俺の一番上の娘だが。ああ、黒伯爵殿と会うのは三千年ぶりぐらいになるか。閣下の晩餐に呼ばれてね、本来なら正妻を連れる所だが面倒くさいと振られてしまったので、仕方なく娘を連れてきたのだ」

晩餐。

そういえば、妃を持つとそのような面倒なこともあったか、と心の中でばやいた。

愛妾を伴って若い頃は軍の横繋がりを深めるためだとか何とかで無理やりに侯爵に参加させられたものだ。

伯爵の爵位を承つてからは戦場に近い辺境に領地を得たために、この侯爵邸に訪れるのは数年に一度だった。

戦場への通達も、戦勝の報告も全ては配下の魔将が伝書鳩の如く担っている。

「そうであったか。……気づかぬうちに大きくなられたものだな」

「ふふ、27人も愛妾を囲う多忙な黒伯爵殿には、くれてはやらんぞ」

「そのことで侯爵閣下に文句をつけてきた所だ。閣下は我が妃を娶るまで戦場には出さぬつもりのようなうだ。ああ、……危惧せずとも、そなたの娘を娶るつもりなどないわ」

ガレリウドが嘆息すると、レヴィンは面白そうに笑った。

ライバルとも言える立場にあるガレリウドが戦場に出ないとなると、全軍の統率を任されるのはレヴィンに向けられる。

大規模な戦であればガレリウドと軍を半分に分けて連携をとるものだったが、小規模程度ならレヴィンの軍団だけが戦場に行くこともあるからだ。

ガレリウドのように前線に立つて槍を振り回すことはないが、策を講じて陥れる戦を好むレヴィンにはやりと隠しもしない笑みを浮かべる。

「侯爵閣下に俺の功績を上げておく機会だな」

「好きにするがいい」

対してガレリウドに出世欲は全くもって皆無である。

敵視もしていなければ、戦友というものでもない気がする。

『 助けて』

また、あの声が脳裏に流れた。

首を傾げた動作に、レヴィンが訝しそくに顔を顰めた。

「珍しく調子が悪そうだな、それほど戦場に出さないとされたのがシヨックだったのか？」

「いや。……微かに声が、聞こえたのだが」

「誰のだ？」

「知らぬ……」

「なんだそれは。まあ、黒伯爵殿に届く声など「殺してくれ」というようなものだろう。望み通りに殺してやれば良いだろう。さて、レティ、そろそろ侯爵閣下が待ちくたびれているだろうから行くぞ」

からからとレヴィンが笑いながら、娘を連れて回廊を歩き出す。ガレリウドは再び嘆息すると、侯爵邸の長い回廊をレヴィンと反対のエントランスがある方向へと歩いた。

脳裏に流れる声音はまだ続いている。

すれ違つ貴婦人や、男爵級貴族が道を開ける中、声の主を探してみたが、その誰ともつかなかった。

「望み通りに殺す、か……」

レヴィンの言葉を反芻しながら、侯爵邸のエントランスを出ると一人呟いた。

希求の声は、確かに「殺してくれ」とでも言っているような悲痛の叫びだ。

どこの誰が呼びかけてきているのかは謎ではあるが、このまま呼びかけ続けたら睡眠妨害も良いところだ。

そのまま領地に戻ることなく、ガレリウドは転送陣のある門へと足を向けた。

3・藤壺の君

「香子さま、春宮さまから御文が届きましたよ」

下げた御簾の隙間から、使いに用いていた女房の琴式部が、文を机に差し出した。

恋を綴った和歌が書き連ねられて、返歌を待つ文。

返歌次第で春宮の側室として即位された頃には弘徽殿に戻されるか、或いは先帝の寵姫で内親王の母として、今居る藤壺で慎ましく過ごすか。

本来なら、次期帝を振ることは天にも背くこと。

それはつまり、断れない。

返歌で春宮に嫌われるなりしなければ、この宮中からは出ることは出来ない。

しかし、うんざりした様子で溜息をついたのは、藤壺に住まう中宮香子。

左大臣家に生まれ、幼少より帝の側室として教養を身につけられた、生粋の貴族の箱入り娘。

14歳で32歳も年上の先帝の側室として女御の位で入内し、すぐに身籠ったためにあつという間に立后し、中宮まで上り詰めた。

時の女性であるなら、誰もが羨むような生活が保障される。

かのように思えた。

子を宿してから9ヶ月目に差し掛かった頃、里邸に下がって宮中を空けていた折に、先帝は突然の流行り病に伏して、そのまま崩御された。

女御として入内して、中宮となっても弘徽殿の間に住んでいた香子だったが、出産後の宮中へ戻る頃には、住居は弘徽殿ではなく藤

壺に移された。

49日の喪が明けて、先帝の弟である現帝が即位し、春宮には現帝の長子が選ばれている。

それを快く思わなかった香子の父が、春宮と香子を結ばせようとしたのだ。

春宮から見れば伯父嫁にも当たる縁族ながら、この時代に於いては政治的な婚姻が物を言う。

宮中に戻って3年、内親王が3歳を迎えると、父は内親王を伊勢斎宮に選定して引き離した。

現帝の健康状態も芳しくないと聞く。

そこへ伊勢斎宮と引き離されて1年経つか、経たぬかのうちに、22歳になる春宮と、未亡人とはいえまだ19歳の香子を引き合わせたのは、政治的な目的がなければ結びつかないのも同然と言えた。藤壺で過ごす4年の間に、春宮以外に若い親王や大臣に求婚の和歌を送られたが、父は帝か春宮以外にしか取り次がぬように女房に言い含めていたのだろう。

帝の側室になるべく育てられたのだから、それが当然とばかりに

「春宮さまからの文だというのに、浮かない顔でございますね」

琴式部は返歌の代筆をするために筆を準備し始めている。

このままいけば、父の思惑通りに事が進み、また子供を産むことを望まれる。

内親王ではなく、親王を産んで、その子が春宮に、そして帝へとなれば、父は喜ぶのであろう。

そう出来るまで、道具に成り下がるのが、香子に強いられた生の意味。

「……琴式部は、わたくしが春宮さまの側室になっても良いと思っ
ているの?」

「あら。香子さまは本当に奥ゆかしいですね。たいそう可愛らしいのですから、きっと春宮さまにも気に入られて中宮さまとなられるでしょう。その方の世話を出来るというのは、宮仕えの女にとって一番の喜びでございます」

和歌の才能もあり、琴を弾かせれば名人という女房は、得意の琴をとって琴式部と呼ばれている。

忠実で主人を立てる言葉も、確かに悪い気はしない。

この者が、自分の女房で居てくれることを、香子は、いつも感謝している。

「そうね。……でも、わたくしは 春宮さまと結婚したいとは思っておりませぬ。きつと、生まれてくる時代を間違ってしまったのかも知れない」

物心ついた頃より、蝶よ花よと入内する身として相應しい教養を覚えさせられた。

けれど、それはいつも心が締め付けられる窮屈な想いも生んだ。父が認める帝になる人以外には、恋をしたり愛したりすることは出来ないのだと知った。

「まあ、他の女御様に聞かれたら、嫉妬されますよ」

「構いませぬ。……わたくしは、この柵から抜け出したいわ。先帝が崩御なされたのに、宮中に戻されることばかりか、また春宮さまに嫁ぐなど……」

「先帝さまのことが忘れられぬのですか？ 歳が違いすぎたのに、それほど閨が良かったのでしょうか」

「そうではありませぬっ！」

からかうような物言いをした琴式部に香子は思わず声を荒げると、

また溜息をついた。

先帝との閨は14歳という初心の身には、恐怖と悍ましさを植え付けられたもの。

この世にお産という痛みも命を落とすかと思うほどの痛みであったが、生まれた子は美しかったからまだ許せる。

けれど、閨という好きでもない相手に抱かれるだけの痛い仕打ちは、身も心も痛い。

助けてほしい。と、神社に赴いては何度も願ってみたけれど、状況は変わらない。

変えるには、自ら行動しなければ何も変わらないのかもしれない。落飾は父に見つかっては意味がないかもしれない、だが自害も宮中では認められていない。

「琴式部、返歌をお出しするのは、もう少しお待ちなさい」
「ですが、あまり待たせてしまうと、お心が離れますよ」
「少し考えたい時間が欲しいの。花見でもして心を落ちつきたいわ」
「それは良いですね。天気も良いですし、早速外出の手配をします」
「ります」

筆を置きなおした琴式部は、移動のために使う青車を手配に藤壺の間から退室していった。

香子は残された文を見つめて、手に取り目を通した。

何度見ても、あまり上手とは思えない恋文。

その恋文に交じった他に、色褪せた文がもう一つ畳まれていた。

何だろうと思ひ、文を開けば訃報を知らせる文だった。

伊勢斎宮の訃報。

それは、つまり香子が産んだ僅か4歳にも満たぬ娘が亡くなった

といつこと。

文の色褪せ具合から、それがいつのことかはわからない。
愕然とし、文を見つめる視界は涙で霞んだ。

4・悲観

琴式部が戻ってくる足音に、香子は文を隠すように元に戻した。恐らく琴式部はこの文を知っているはずだ。

全ての文は琴式部が取り次ぐことになっている。

主人宛ての文を勝手に読むというのはモラルに関わるが、中には好ましくない文が混じることもあるため、そうした文は取り次がない。

檜扇で顔を隠し、懐紙で目元を拭った。

「手配して参りました」

御簾が開けられ、どうぞとばかりに促される。

急いできたのか、琴式部の十二単の裾が翻っており、いつも着付けや、身のこなしに厳しいのに珍しい。

「ご苦労様です」

「いえ。……あら、香子さま、御髪が乱れておいでですよ」

「それは、……琴式部を待つ間に温かな陽気につとつとして、壁に寄り掛かってしまったから」

とつさの言い訳だが、琴式部は何も言わずに香子の前髪を手櫛で整えた。

その間は顔を隠しておいたが、寝起きの顔を見られたくないという風に捉えたのかどうか、何も突っ込まれることはない。

「すぐ傍に待たせておりますから、参りましょう」

「ええ……」

促され、香子は藤壺の間を後にした。

遅れて琴式部が文を片づけて、こつそりと色褪せた文を袖に忍ばせたのを御簾越しで捉える。

ああ、やはり……彼女は知っていたのだろう。

急いで戻ってきて裾が翻っているのも気づかなかつたのは、余程、あの文を見られないようにと気を揉んだからかもしれない。

琴式部を問いただすのは簡単なことかもしれないが、そうしたことで伊勢斎宮は……娘は戻ってこないのだ。

熱くなりそうな目頭を押さえると、首を降り、また扇で顔を隠したまま用意された青車へと乗りこんだ。

花見の名目で訪れた近くの山。

もう少しで満開を迎えるのだろうか、桜の花はまだ八分咲きといったところだ。

どの木が美しく咲くのかを見て回り、気に入る木の傍で立ち止まる。

「香子さま、こちらは崖に近いですから、もう少し足場の良い所へ参りましょう」

「そうね。でも、少し疲れてしまって……。ここで休んでいますから、琴式部はこの木よりも美しい木を探して見せてくださいな」

「そうですね？ ……わかりました。動いてはダメですよ」

念を押すような琴式部に頷きを返し、見送る。

これで暫くは……他に人は居ない。

そう辺りを見渡すと、桜の木の傍にある崖を見下ろした。

眼下には川が流れており、落ちれば小袿姿の今なら重みで命を絶つことが出来るかもしれない。

だが、中々に踏み出すというのは勇気の要るものだ。

ごくりと、喉を鳴らして深呼吸を試みた。

身を投げれば、輪廻転生に従って次に生まれてくる時は、違う形で生まれることが出来るかもしれない。

夫と呼ばれた存在にも先立たれ、娘にも先立たれ、残った父には道具のように使われる。

そこに、香子としての人權はないに等しい。

きらびやかな宮廷生活は女の嫉妬と、男の権力争いに帝が振り回されている。

自分の人生を、自分で決めることのできないという絶望の淵に、生きる価値は見出すことが出来ない。

助けてと願っても、願っても……誰にも理解されない。

じやりつと砂音を立てて、崖に足を踏み出した。

目を閉じれば、きつと一瞬で逝けるはず。

目を開けたときには、きつと新しい命として生まれているはず。

ぎゅつと目を閉じて、身を乗り出し、崖の大地を蹴るようにして飛んだ。

「香子さまっ!?!」

琴式部の声音が落ちている身の中で聞こえたような気がしたが、意識はすう　　と遠くへ沈んだ。

あの子だけは、わたくしが死んだら悲しんでくれるのかしら。

入内した頃より、仕えてくれている琴式部。

年齢差はあるものの、いつも親身になってくれていた。

時には厳しく、時には優しく、姉のような存在。

せめて、彼女にだけはごめんなさいと、一言謝っておくべきだったかもしれない。

だけど、彼女なら……他の女御さまにも、きつと気に入られる優

秀な女房となるだろう。

将来を絶望としか思えていないわたくしなどに仕えるよりも、ずっと……ずっと、出世なさる女御さまに就くことが、彼女の夢なのだから。

これ以上、縛るわけにはいかないのだ。

風を切る速度が増し、身体が何かにぶつかるような衝撃が香子に走った。

けれど、それは不思議と痛くはない。

先帝や娘は流行り病で苦しんで死んだけれど、己はこうまでも楽に死ねるものなのだろうか。

それとも死は感じる事が出来ないから、わからないだけなのか。どちらにしても香子の意識は、そこで途絶えた……。

5・声の主

転送陣から転移した先、眼下に広がるのは緑とピンクで彩られた山。

見える街並みは碁盤目上で、街自体が要塞のように連なる建物。高いビルが並ぶわけでもなく、科学の発展した機械や、魔術の発展した魔力は感じられず、文明レベルはそれほど高くないようだ。

ガレリウドに呼びかけられている声の主を探すために、転移してきたものの、どうにも異世界というより異次元レベルで違うのかもしない。

街ではなく、山の中に陣が敷かれたのだから、少なくとも山に声の主が居るのだろう。

「まさか、迷子というわけでもあるまいな……」

独白を零しながら、小さく嘆息すると辺りを見渡した。

声だけが頼りであるから、どのような姿の者なのかは見当もつかない。

具体的な場所がわからなくとも、姿がわかり、己の所有物としての印でもつけていれば、転送陣であつという間にその者の居る場所へと飛べる便利な魔法陣だが、全てが万能というわけではない。

ガレリウドは目を閉じて耳を澄ませてみる。

微かに聞こえるのは、数人の足音、トーンの高い女性と思わしき声、脳裏に流れてきていた声とはやや異なる。

ここよりも上から聞こえるようだ。

ふと、見上げれば突然視界に入ってきたのは、緋色と黒を基調にした丸くて大きなものだった。

「なっ……ん、ぐっ　!？」

それはガレリウドを避けることもなくまっすぐに向かってきていた。

何かの畏かと思ひ、咄嗟に帯剣していた剣の柄に手をかけたが、近づいてくるにつれて徐々にそれがはつきりとしてくる。

幼さの残る顔が黒い塊から覗けば、それが人であることがわかる。剣を握る手は自然と抱きとめる形となったが、幼い顔とは裏腹にそれは予想していたよりも重みがあった。

重みの理由が、着ているもののせいだと気付いたのは、受け止めたときの感触で気づくことになる。

黒い塊は、長く艶のある髪。

落ちてきた時に煽られた風のせいで、その髪はぐしゃぐしゃになっていたが、さらさらと真っ直ぐに地面に垂れる。

気を失っているのか、余計に重く感じる女の身。

足場の悪い場よりも平たい場の方が良いかと考え、ずしりと重い女を抱きかかえたまま、山道の獣道を歩いた。

緩やかに開かれた木の根の近くに凭れ掛からせるような形にして支えていた身体をゆっくりと落とすと、改めて髪を手櫛でかき分けて顔を晒す。

年端もいかぬような顔は、白く明らかに化粧をしている……それも厚化粧とも思えるほど、眉は随分と高い位置に薄く引かれ、唇は中心部のみ紅が乗せられただけで、全体的にはのっぺりとした顔。着ている服は一体何枚着こんでいるのかと思うほどに、色とりどりの襟が幾重も見えており、袷が開いている。

魔族が住まう世界とは明らかに、異郷の地で、異文化と言える。

「……ん、っ……」

僅かに、女が呻いた。

気が付いたのだろうか、ガレリウドは覗き込む。

異郷の地で会った娘が、声の主であるかどうかを確認するために、色々と問わねばならない。

薄く開かれた瞳は切れ長で、ぼんやりとしている。

「気が付かれたか」

言葉が通じるかどうかまではわからないが、ガレリウドが声をかけてみると、女の視線と交錯して一瞬の間が合った後。

「きゃあつ　！」

甲高い悲鳴をあげられて着ていた衣服の長い袖で顔を隠された。思わず、ガレリウドも目を瞠る。

それほどまでに吃驚されるとは思っていなかったが、だがこの娘の異文化感たつぷりの風貌では、ガレリウドの軍装姿というのは、この世界ではミスマツチなのかもしれない。

悲鳴は一瞬だったが、甲高いそのトーンは聞き覚えがある。

「あの声は、そなたであったか」

再び声をかけたが、娘は袖で顔を隠したまま頑なに身体を縮こまらせた。

上から真つ逆さまに降ってきたにしては、随分とまた臆病者である。

足を滑らせて転落したのか、それとも突き落とされたのか、どちらにせよ低い文明レベルでは娘に空が飛べるといふ理屈は通りそうにない。

娘の悲鳴が大きかったせい、頭上では騒がしい足音が土を鳴り響かせている。

「言葉がわかるのであれば、何か申してみよ。そなたは願ったのだらう、『助けて』と。形は違つかもしれぬが、死ぬ手前では『助かった』はずだ」

ガレリウドがゆっくりと言葉を向けると、娘の袖口で隠す顔が僅かに動いた。

ぐしゃぐしゃの黒髪が斜めに傾き、首が傾げられたような仕草。それでも顔を隠したままというのは如何なものか。

怪訝に表情を向けるが、恐らくガレリウドの表情など見えていないだろう。

そして、漸く空から落ちてきた娘が口を開いた。

「……わたくしは、死ぬことが出来なかったのですか？」

それは、ガレリウドを誰かと問うような普通の問いではなく、助けた御礼とも違う絶望の声。

どうやら言葉はわかるようだ。と、ガレリウドは心内で安堵する。彼の抱える愛妾の中には言葉が通じない者も居るために、コミュニケーションをとるのにとても苦労するのだ。

「死にたいと願うのであれば、殺せなくはない。だが」

そう、ガレリウド自身はこの脳裏に流れてくる声の主を探して、気の滅入る声を消したいのだ。

だから、願い通りに助けてほしいなら、助けて解決する。殺してほしいと願うなら、殺して声が聞こえなくなることを望む。だが、彼が殺すのは己が仕える侯爵閣下に仇なす敵のみ。

レヴィンのように、罨をもって敵味方関係なく無差別に殺すという美德は持ち合わせていない。

殲滅將軍と異名をとるが、己の信念を曲げることはない、魔族の

中でも戦いに美德を持ち込む変わり者だった。

「だが、何ゆえに死にたいと願うのか聞かせてみよ」

6・理由

相変わらず女は袖で顔を隠したままだった。

面と向かって話す習慣がない、ということガレリウドは理解出来ない。

だが、それは異国の娘ということで、隠す袖を払いのけてしまいたい衝動を抑える。

「そ、それは……」

答えようと口を開きかけた娘だが、言葉は紡がれることはなく、衣擦れの音だけが風と共に流れた。

ふるりと、長い黒髪が左右に揺れて、着ぶくれした肩の辺りも震えている。

どうやら泣かせてしまったらしい。

これだから、女の扱いというのは難しい。

泣いたかと思えば、次の瞬間には笑っていたりする場合もあるから、注意が必要と、この長き生の中で知っている。

どうしたものかと困惑していると、聞こえていた足音が大きくなってきた。

「中宮さま？ 中宮さまー？」

甲高いトーンの声は、異世界に降り立った折に聞こえたものだ。この娘を探しているのか、追われているのか、はたまた別人か。

「 殺して、ください」

「なんだと？」

理由を聞いているのに、切羽詰まったように告げられる。それだけで、あの声の主には見つかりたくないということなのだろう。

面倒だとは思ったが、無暗やたらに殺す主義のないガレリウドは、周囲に手を翳した。

掌から煙状のものが噴き出て、形を形成して徐々に具現化する。それは幻影とも呼ばれる下級魔術の一つで、何ら害のないものが、文明レベルの低い手合いには脅威的なもののように見えるだろう。

大きく具現化したのはグリフオンの翼をもつ獵犬、グラシヤラボラスと悪魔の中では呼ばれている幻影。

「これで邪魔立ては入らぬだろう。理由を聞いているのだ」

レヴィンのように冷酷なものなら、さっさと殺しているのだろうな。

我ながら気の長い面が己にもあるものだと思いながら、再度問う。

「……つく、……お聞き、くださるの、ですか？」

しゃくりをあげながら問われる。

そのまどろっこしさは、何とも形容しがたい。

意のままに、さっさと言えども剣を突き付けても、この娘は恐らく言わないだろう。

それよりも、突き付けた剣に自ら飛び込んで自害しそうなものだ。何せ死のうとして、飛び降りたようなのだから。

「聞いてやる。そなたが『助けて』と願ったのだろうか？ 断片的にその言葉しか伝わってこなかったが、死にたいと望むなら先ほどそなたが発したように『殺して』と、願うはずだ」

そう告げると、娘は吃驚したように一瞬だけ顔を上げて、また伏せてしまった。

あの脳裏に響いた声は、この娘の声で間違いはないのだ。

「願いました……。わたくしは、……道具や人形のような扱いから抜け出したいのです。唯一穏やかで居られた娘とも引き離され、その娘が亡くなったことも知った今、ただ政のために使われる道具として宮中に閉じ込められ生かされるのは、嫌なのです」

ようやく娘が理由を話し始めた。

だが、やはり異世界。

言葉の断片から全くもって理解出来ぬことがガレリウドには多々ある。

道具のような扱いを受けるのが嫌だというなら、嫌だとはつきり言えば良いはずと、そこまで考えてから、この娘が言える立場でないのか、それとも言ったところで覆らないのかと知る。

宮中というのは、どここのことを指すのかわからないが、邸のようなものだろう。

そんな風に娘の言葉を、己のわかるような語彙に変換しながら聞く。

「そなたの意のままに生きられないから嫌だと申すのか？」

「わたくしの意志は生まれた頃より、何一つ叶わないのです。ただ、帝になる子を産むだけの道具としてだけ生かされる」

帝という単語は恐らく皇帝や王のことを示しているのか。

異文化でも、そういった上下関係はあることは多い。

つまりは、娘は子を亡くしたばかりなのに、また王の子を産む種馬としての扱いが嫌だと言うことか。

ガレリウドの愛妾でも、生まれる前に子が亡くなっている。

魔族の女でも、子を産めなかったというショックは随分大きく、宥めるのに何十年とかかった者もいるものだ。

愛妾たちと違うのは、子を産むことを宿命とされた扱いに不満だということ。

女の心理というのはガレリウドにはよくわからないが、出産に命を落とすこともあるという話は耳にする。

魔族の場合、宿した子供の魔力が強大であればあるほど、母体となる者に負担がかかるのだ。

「死すれば、状況が変わるとでも思ったのか？」

「……輪廻転生の下、この世ではない運命を望んで」

「そのようなものはない。死すれば、無だ。肉体は滅び朽ち果てる。魂が留まるには、それなりの業がある。そなたは、見たところ年端もいかぬ身でそのような、つまらぬ理由で死にたいと願うのか？」

娘の言葉を遮ってガレリウドが続けた。

魂や肉体には永遠はなく、いつか必ず滅びる時がくる。

ただ生命の長さが種族によって違うだけで、輪廻転生が本当にあるのなら、魔族の世界など戦をする意味がなくなってしまう。

魔族は元々、忌々しき天使と呼ばれるものの派生。

墮天使と烙印を押された末の種族なのだから、輪廻転生で前世の記憶まで持っていれば元々天界は平定していたのだから、今頃天界との戦争も、魔族同士での戦乱も起こらない。

「つまらぬ……？」

「そうだ。つまらぬ。柵から抜け出したいというのなら、死なずとも生きて抜け出せば良いだけのこと。それがそなた一人の力では出来ない、だから『助けて』と願った……ということであるな？」

「……はい」

「簡単なことだ。違う世界で生きれば良い」

そう告げて、ガレリウドは娘の言葉を一つ一つ思い返す。今まで愛妾として迎えた魔族は、出産の経験のないものばかりだった。

この娘は子が居たというからには、出産の経験がある。帝の子を産む道具になりたくはないとは言っていたが、なりたくないだけで、なれないというわけではない。

それに、頑なに隠す顔や艶やかな黒髪を綺麗に整えたら、どうなるのか見てみたいという気にも駆られる。

妃を作って子を為せとは侯爵閣下に命を受けたが、子を為さぬ者を妃として迎えることが出来ない今、出産経験のある女というのはガレリウドにとって貴重な情報源ともいえる。

声の主を探しにきて得た収穫は大きい。

「違う、世界……?」

「条件を飲むというなら連れてやろう。飲めぬというのなら、望み通り 殺す」

それは悪魔の囁きのようにも思えるのかもしれない。

脅すような物言いだ、ガレリウドには殺すつもりなど到底ない。飲めぬというなら、娘が飲むというまで躑躅すれば良いだけのことだが、彼の思いに反して娘の言葉は脳裏によみがえった声と一致した。

「……助けて、ください。この世を抜け出すことが出来るのであれば、厭いませぬ。ただ、わたくしに出来ることなら」

その言葉に、思わずガレリウドの口角が知らずのうちに吊り上った。

7・帰還

「我が質問にわかる範囲で答えて過ごせば良い。質問をするか
らには我が傍に暫くは居てもらうが、長くて3ヶ月だ」

まだ名も知らず、魔力の波動は感じられぬが得体も知れない小娘。
提示したのは、問答の相手になれという誰にでも出来るもの。
誰にでも出来るが、ガレリウドにしてみれば、貴重かつ目的を果
たせるかに関わる重要な問答の相手。

「それ、だけで……宜しいのですか？」

「二言はない。条件を、呑むなら顔をあげよ」

言葉をかけると、娘は間を置いてから顔を隠す袖が下がり、目元
だけを晒した。

髪と同じ漆黒の瞳は、怯えと哀しみに満ちて潤み、肌は赤く染ま
っている。

化粧である白肌が涙の筋痕で、上げさせた顔は崩れていて、ガレ
リウドは思わず顔を見てみたいと欲を出して上げさせたことを後悔
した。

娘の方も、ばつが悪いと思ったのか 実際は恥ずかしさに耐え
切れなくて また袖で隠してしまった。

「手始めに名を聞こう」

咳払いを一つ零し、ガレリウドは改めて質問を娘に投げかけた。

「……香子、と申します」

カシ。

聞きなれない、響きの名だ。

だが、短く覚えやすいと思えば、長く噛みそうな名よりも良い。

「では、香子。良いというまで、目を閉じておけ」

香子と名乗った娘が、袖を掴む手に力が込められているのを見届けると、ガレリウドは香子を抱き上げた。

気を失っていない分、先ほどよりは重みはないが、だがやはり身体肉感を感じられない。

一体、何枚着ているのかとか、何故そのように髪が長いのかとか、色々と気になってしまう。

それらをぐつと堪えると、震えた身を抱き上げたまま、転送陣のある場に戻った。

作り出した幻影は霧散し消えかけている。

転送陣の中へ香子を抱えたまま、足を踏み入れて念じる。

行先は侯爵閣下の地ではなく、ガレリウドが統治している地で居を構える異世界。

多種多様の魔族が住まう戦乱の多い辺境地だ。

転送は一瞬のこと。

陣の開いた先は、ガレリウドが住まう邸内の庭だ。

元々この地は、侯爵閣下の別荘として使われていた地だったが、戦場に近いために侯爵閣下が前線を立たなくなった現在では、代わりに前線に立つことの多いガレリウドに任された領地だった。

戦場を好まない愛妾は遠く離れた地に居を構え、逆に血の気の多い愛妾は戦地に近い所に居を構えている。

「おお、今度はちゃんとガレリウドさまだっ。お戻りでしたか。：

…困ったことが　って、なんですか、このマットレス2号は？」

魔力の波動で帰還を察知したらしい、邸内で己の代わりに留守を頼んでいた魔将の一人、金色の癖髪を揺らしたイグネルフが、困惑した顔で報告しようと口にしかけて、腕の中で抱く香子に気付いてあんぐりとした。

マットレス、と言われると確かに香子は、それぐらいの厚さがあるかもしれない着衣をしている。

声が聞こえたせいで、香子が身じろいだが、言いつけ通り頑なに目を閉じているようだ。

「一応、異国の娘、香子だ。2号とは何だ、お前はこの香子のような者を他に見たことがあるのか？」

「あるも何も、今しがたガレリウドさまが帰還なさる前に、喋るマットレス1号が邸を徘徊して困っていたところですよ。ああっ！ 異国の娘ということは、まさかと思いましたが、また保護なさったり、懐かれて愛妾にする気ですか？」

イグネルフは声を荒げて捲し立てる。

愛妾にすると言うと、こうして煩く咎めにくるのは毎度のことだ。うんざりとしながら、ガレリウドはイグネルフに首を振る。

「暫く客人として扱う。それで、その徘徊しているという者は邸のどこに？」

「エントランスです。取り押えておりますが、しきりに『チューグーさまはどこだ』としか、口にしないので

「チューグー？」

怪訝に顔を顰めると、腕の中からその答えを示された。

「それは、わたくしのことだと思えます……」

香子が口を聞けばイグネルフが、こめかみに手を当てながら「マツトレス2号もやはり喋るのか」と呟いていた。

イグネルフは少々神経質な面があるから、異文化の受け入れというのは時間がかかる。

フェンリルの血が混じる娘を保護した折も、イグネルフは魔獣を拾ってくるなどと愚痴を零しては、深き森に娘の住まいを造らせるまで近づかなかった。

何でも過去にフェンリルの子供に外套を台無しにされた以来、嫌いだとか。

それはともかく、異世界で幻影を見せていた間に、香子を知る者が転送陣に紛れ込んだのか。

だが、魔力を持たないものが転送陣を扱えるとは思えないのだが、あの異世界にも魔力を持つ者が居たということだろうか。

ガレリウドは香子を地に下ろすと、目を開けても良いと命じて手を引いた。

後ろからイグネルフも、相変わらず「マツトレス2号が歩いている」とぶつくさ文句を言いながらも、ついてくる。

「香子。チューグーとは何だ？」

庭園からエントランスまでは暫く距離がある。

手を引く間、香子は反対側の手で顔を隠している。

これはもはや癖なのだろうか、とガレリウドは思ったが後でまた質問することにしようと思える。

「帝の妻の呼称です……。わたくしの国では皇后、中宮、女御、更衣と位があり、名で呼ばれることは少ないのです」

「ふむ。……随分と、複雑そうだな」

これは理解するのに、イグネルフではないが時間がかかりそうだ。エントランスの前まで来ると、押し問答と思わしき声が響いている。

そのトーンは、幻影を見せるきつかけになった声でもあり、異世界に降り立ったときに初めて聞いた声でもある。

これを聞いたときに、殺してくれと願ったのは香子だ。

「さて、心当たりはあるだろうか。……つまみだせと願うなら、あの異世界に戻してくるが」

「……琴式部。わたくしの身边を世話する者です。あの……お邪魔でなければ、一緒に置いてくださいませ。今、わたくしの国に戻したら、あの子は宮中を追われることになると思うのです」

「それはなりません！ 得体の知れないマツトレスが2つも徘徊されるなど、邸の景観に関わる上に、伯爵ともあるう方が」

「わたくしからすれば、あなたも得体の知れないものです。そのような酷い寝癖をつけた髪で渡り歩くなど、はしたない」

怪訝を露にしたイグネルフに対し、香子が言い返した。

泣いたり願ったり、悲観的な面しか見ていないが、意外なものだ。

「なっ……ッ、この髪は元々こういう髪質で……一体、何なんですか、マツトレスの分際で。ガレリウドさま、この小娘を置く理由を後でじっくり聞かせてもらった上で、不要とあらば私が異世界に送り返して」

「イグネルフ。お前は少し黙っている。この件は私の独断で決めたことだ。決定権は誰にあるかわかるだろうか？」

イグネルフはまだ腑に落ちない様子だったが、エントランスの扉を黙って押し開けた。

そこには、香子とよく似た衣服を身に着け、長い髪を垂らし、扇で顔を隠している娘が背筋を立てて正座したまま、邸内で働く魔族の文官たちに囲まれていた。

娘の周りは移動と魔力封じの陣が敷かれて、陣の外に出られないような簡易の魔術だ。

捕えたというのが堂々とした座りっぷりに、文官たちも困り果てている。

「中宮さまっ!?!」

扉が開いたことで、扇で顔を隠していても、その隙間から覗き見たのか声が響いた。

「香子。そなたの知り合いに相違ないのだな」

「はい。……琴式部に間違いございません」

「この者らは『客』だ。陣を解いて各自の持ち場に戻れ」

命令を下すと、文官たちの揃った返答と共に琴式部と呼ばれた娘に敷かれた陣が消えた。

8・再会

陣が取り払われたことで、琴式部が動けるようになる、香子がすぐにでも膝をついた。

「式部……。ごめんなさい」

「何を謝るのですか？ さあ、中宮さま。帰りましょう」

当然とばかりに、琴式部が香子の手を引いて立ち上がらせた。けれど、香子は動かない。

怪訝そうに振り返り、琴式部は首を傾げた。

「わたくしは……帰りませぬ」

「えっ？」

「ですから、宮中には帰りませぬ。この方に、お願いをしたのです。宮中から出られるようにと」

この方、と指示されたガレリウドは一瞥しただけで何も口を開かなかった。

ただ、どうするのか、事の成り行きを見守っている。

それにしても香子も、琴式部もやはり顔を隠したまま会話している。

全くもって不可解な会話法であるが、それが異文化の作法なのだろうと無理やり納得するしかない。

「ですが、春宮さまからの文はどうなさるのですか？ せっかく、弘徽殿にまた戻って、今度こそ国母になられることが出来るかもしれないというのに」

「宮中に、……弘徽殿や中宮としての未練などありません」

「では どうするおつもりですか？」

「自害しよう……した折に、この方に助けて頂きました。暫くはこの方のお相手をして、それから決めます」

行き当たりばったりで良いのかとばかりに、琴式部がため息をつく。

だが、次の瞬間には意を決したように毅然として。

「中宮さまを一人にしておくわけには参りません」

「わたくしも、式部には助けてもらいたいと思っております」

「はあ……。貴女という方は、本当に破天荒な中宮さまですね。それで一体、ここはどこで、中宮さまを誑かしたのはどなたですか？」

何とも切り替えの早い様子で、琴式部は矢継ぎ早に質問をしてくる。

その答えについては、香子も知ることではなく、やや困ったのか扇越しにチラリとガレリウドへと視線を移している。

「このような所で立ち話をする気はない。ひとまず、ついて来ると良い」

ようやく、言葉を発したガレリウドは後のことをイグネルフに任せるようにすると、エントランスから延びる螺旋階段を上る。

このような建物を見るのもおっかなびっくりといった様子で、香子と琴式部が続いた。

衣服の裾を踏まないようにと慎重になっているせいか、その足取りはとても遅い。

衣服の重みもあるのだと思うが、階段を上りきつてもゆっくりとしか歩かないのだから、ガレリウドは抱きかかえた方が早いのではないかと思っただけだ。

入り組んだ廊下を歩き、客間として使われる一室へと二人を案内した。

異文化では、生活様式も随分と違はずだ。

ガレリウドは邸内で働く女性の小間使いを数人呼ぶと、香子と琴式部を客として扱うように言い、まずは疲れているだろうと湯殿の準備をさせた。

「慣れぬだろうが、全てこの者らに任せておけば良い。落ち着いたら話が出来るように取り計らう。それまで、少し休んだ方がよかるう？」

琴式部に至っては、恐らく邸内の魔將に狙われそうになったであろうし、移動封じや魔術封じの陣を敷かれていたのだから、身体への疲労や負担は多いはず。

タイムリミットは3ヶ月であるが、まだそれは時間がある方なのだ。

香子と琴式部が休んでいる間に、口うるさいイグネルフへも言い含めなければならぬだろう。

侯爵閣下を受けた命によれば、暫く戦場には行けないということだから。

つまりそれは、文官が受けるような面倒くさい領地の内政に励まなくてはならないという示唆。

やれやれと息をつきながら、香子と琴式部は小間使いに任せて、ガレリウドは私室へと戻った。

9・宥め

「それで、ガレリウドさま。あのマットレスをいつまで置いておくのですか？」

私室に戻ると早速とばかりにイグネルフが問い詰めてきた。

執務用の机に、ゆったりとしたソファート、天蓋のついたキングサイズのベッド。

本来ならもう少し小さな部屋で、眠るだけが目的とした部屋で良いとガレリウドは主張したが、イグネルフが伯爵閣下の私室が粗末な部屋では示しがないという理由に押し切られ、調度品は飾り立てず必要以上の家具を置かないと譲歩した上で、使っている私室だ。

戦いの権化であるガレリウドは、戦場に行かない間の過ごし方といえば、領地内の争いを治めるとか、領地内を便利にするために建設している建物などの査察に訪れてみたり、嫉妬深い愛妾の様子を見に行ってみたりと、邸に居ることは少ない。

それでも邸を疎かにするわけにも行かず、イグネルフを始めとして腹心の魔将や、使用人を置いてはいるが、伯爵邸としては魔族の中でも最も簡素な邸となっている。

ガレリウドは執務机に供えられた柔らかい背凭れのあるリクライニング式の椅子へ身を沈めて、対面で立つイグネルフを諭すように口火をきる。

「マットレスではなく、香子と……、琴式部というそうだ。ひとまず、三ヶ月は置く。侯爵閣下に妃を娶って子を為すまで、戦場には出さぬという命令を下された。その期間が三ヶ月だ」

「妃……ですか？ まさか、愛妾ではなく、あのどちらかを妃に迎えると？」

「そうではない。侯爵閣下の邸で香子の希求の声を聞こえた為に答えただけのこと。それに 香子は、子を為したことがあるというから、参考になることが聞けるかもしれないだろう。イグネルフは腑に落ちないだろうが、私の愛妾が子を宿しても産み月になる前に子が死んでしまうのは何故だと思う？」

魔族同士の子孫繁栄はそれほど難しくはない。

それゆえに、異なる種族の魔族が交わったりして、混血が広がり新しい魔族が増え続けている。

純潔の魔族というのは少なくなってきた。

戦災孤児でガレヴァーン侯爵に保護されたガレリウドは、己自身がどのような魔族であるかは侯爵によって聞かされていた。

魔族の中でも、魔王と呼ばれる種と人間の間生まれ混血種。

内に秘める魔力は大きく、母体となった人間の母はガレリウドを産み落とした後は、床に臥せたまま衰弱して亡くなった。

実は人間との混血は魔族の貴族の中では、あまり好ましく思われではない。

ガレリウドに爵位を授ける際に、ガレヴァーン侯爵がガレリウドの出生を調べあげて、その事実を表向きは伏せられている。

歳を重ねるごとに、力は肥大し、実力だけであれば公爵に並ぶ。

だが、その力を利用して権力に溺れるわけでもなく、伯爵に留まって保護したガレヴァーン侯爵の下で仕えることや、戦場で出会う迷い子のような孤児を拾ってきたり、愛妾として置いたりするのは人の血が流れているからかもしれない。

「はあ……。それは、何とも奇妙な話ではありませんが。貴族の中では、ガレリウドさまの魔力が強すぎるのではないかとか、相性が合わないのではないかと言われておるそうですが」

イグネルフは、もそもそと口ごもりながら答える。

本心ではあるが、主であるガレリウドに自分の意見として告げるのは口幅つたいと思っただろう。

だから「貴族の中では」と、あくまで風の噂というように言葉を濁した。

「我とて理由がわかれば数千年も放置せぬわ。だから聞くのだ。経験者に」

「それなら、初めから他の子を為した侯爵閣下や、伯爵……ああ、レヴィン殿などに話を伺えば良かったのでは？」

「イグネルフ。そのような無粋を侯爵閣下や、レヴィンなどに聞いたら、からかわれるのは目に見えているだろう。自尊心などはないが、女のことを聞くなど我の性に合わん」

それを自尊心というのではないだろうかと、イグネルフは首を傾げそうになったが、口を慎んだ。

三ヶ月、何も変わらなかつたら、あのマッドレスたちがこの邸から消えるのであれば、三ヶ月は我慢するしかない。

やれやれと嘆息したイグネルフは、「お好きなように」としか答えることが出来ない。

だが、それでガレリウドに妃が出来るなら、次々と愛妾を捨てきたり、子供を捨てて来たりすることは少なくなるだろうか。

そんな風にも考えが及ぶと、イグネルフはこれまた複雑な心境になるのだった。

「全く、ガレリウドさまという方は、本当に変わった方だ」

「……ふむ。その物言いは、先ほどの琴式部とやらに似ておるな」

「なッ、あのようなマッドレス1号と同列にされるなど、不愉快です！」

今度はガレリウドが嘆息する番だった。

どうやらイグネルフが、「香子」と「琴式部」をそのままの名で呼ぶのは時間がかかりそうだ。

イグネルフの中では、「香子」はマットレス2号、「琴式部」はマットレス1号となっている。

逆にその方が呼びにくいような気がしたが、恐らく認めるまでそのままであることを、ガレリウドは嫌というほどよく知っている。

「ともかく、邸を勝手に追い出したり、愚弄することは許さぬ。聞けば香子は高貴な身分のようだからな、客人として扱え」

ガレリウドが締めくくると、イグネルフは渋々と承知してガレリウドの私室を退室した。

室内に残ったガレリウドは、もう一度大きく嘆息した。

香子は魔力を感じられず人間の匂いがした、同じ人間の血が流れるガレリウドにしてみれば半分は同類なのだ。

脳内に響く希求の声は殺さずして、手元に置くなど初めは予想もしていなかった。

これがどうして邸まで連れてきてしまったのか、問答の相手とするなら数日で済むことに違いないが、無性に気になった。

それが何故なのかはガレリウドには、まだわからない。

ただ、興味が湧いたにしては、戦以外のことでは珍しいものだ。

「やはり、顔を隠すから暴きたいと思うのだろうか？」

逃げるものを追いたくなったり、秘めるものを暴きたくなる衝動は誰にでもある。

一人呟くが、ガレリウド一人しか居ない私室には、その問いに対する答えは何も返ってこなかった。

香子を客人として迎えて三日が過ぎた。

実に、この三日、文化が違いすぎて苦労したものだ。

食事を出せば、ナイフとフォークの扱い方がわからず、食べ物だと言っても中々理解されなかった。

結局、スプーンだけで、様々な種類をほんの少しずつ口にしただけである。

後から聞けば、それが雅な食べ方だということらしい。

気にせず好きなだけ食べれば良いと言い含めて、なるべく食事の出す量を減らすようにしてからは、器に残ることはなくなった。

着の身のまま訪れたこともあって、こちらの文化に慣れるまで困るからという理由で、一度異世界に琴式部だけが必要な荷物を取りに戻ったことがある。

荷物の中には、イグネルフが嫌がっている分厚い服　唐衣裳束というらしい　や、恐らくあの長い髪を手入れするものと思われる薬品などが持ち込まれた。

転送陣を香子が住んでいたという藤壺の間に開いたために、人目につかず騒ぎにはならなかったようだ。

顔を隠すという文化は、相変わらず理解出来なかったが　。

本来なら声を聴かせることすら、香子の場合には滅多にないという。琴式部のような女房と呼ばれる侍女が、全て代弁して世話をし、声や姿は肉親や夫のみが知るもので、普段は御簾と呼ばれる薄いカーテンのような壁越しであるとか、直接会っても顔を見られることは恥じらうものだとか、説明をされたが全くもって面倒なことである。

結局、問答をするにも、扇で顔を隠されたままであった。

「この三日、そなたの文化のことばかりを問うてばかりだった

が。今日は別の問いをしたい」

「はい……」

「そなたは子を為していたそうだが。子を無事に産むに当たっては、気をつけねばならぬことなどあるのか？」

「はい？」

問答をすると称して、私室にソファーに座らせてから聞いた問い。香子は吃驚したように首を傾げるような仕草が、長い髪が傾いたことで知れる。

「あ、あの……ガレリウドさまは、その……。御子を授かっていらっしゃるお方様が、いらっしやるのでしょうか？」

「居た。というべきだろう。産み月になるまえに全て流れてしまっ
が」

「申し訳ありません……」

何故、そこで謝るのかはよくわからない。

ガレリウドは気にしなくても良いとばかりに、首を振る。

扇の隙間からガレリウドの仕草は見えるようで、小さく縮こまったような香子がおずおずと続けた。

「わたくしの国では、出産は『穢れ』と言われ宮中から宿下がりを
して、出産の間までに祈祷をして物の怪を寄り付かせぬように致し
ております」

「物の怪、だと？」

「はい。出産までにある不幸は全て物の怪の仕業で、祈祷が足りな
いと物の怪に命を奪われるそうです」

人の世界での出産は命がけとはよく言ったものだが、文明レベル
の発達している時代ではそうでもないと言っ。

だが、魔族にそれが当てはまるかというと、 当てはまらない。 祈祷などというのは、忌々しくも神頼みということになる。 宛てが外れたとばかりに嘆息したガレリウドは、頭を抱える。

「他にも、冷えや服毒でも子が流れることがあります。ガレリウドさまは、わたくしたちのような人間ではないとお伺い致しましたから、物の怪を倒してしまわれるのであれば、そういった理由からかもしれませぬ」

嘆息したガレリウドに、香子が付け足すものの、あまり役に立ってなかったとばかりに香子が沈んだ。

結局のところ、ガレリウドが抱えている謎は解明されない。

だが、香子を三ヶ月は邸に置くと決めた以上は、野放しに出来ない。

それに 。

「貴重な答えだ。我はそなたの数千年以上も生きているのに、そういったことには疎い。それに、そなたの文化や意見には退屈な時間ばかり過ごしていた我に、新鮮な風を巻き起こしてくれている」

普段なら、三日も邸に籠っているということはあまりしない。

が、気になって邸に籠っているというのは、ガレリウド自身が知っている。

イグネルフからは、査察の予定や、溜まった書類をどうするのだとせっついてきていた。

生活に慣れるまでは後回しにすると聞いたせいで、イグネルフの機嫌はすこぶる悪い。

「……邸内には、まだ慣れぬだろうが。もう少ししたら、邸のことはイグネルフに任せて、出掛けねばならん」

「どうぞ。お構いなくお仕事を優先なさってくださいませ」

まだ異世界にきて三日で不安もあるはずだというのに、随分と健気だ。

控えめに、慎ましくが雅とするように育ってきたというから、我儘を言うこともない。

侍女の琴式部が、香子を思って時折イグネルフを通して要望を出してきているようだが、香子に「必要なものはないか？」と気を遣って聞いても「何もありません」と返されてしまう。

イグネルフが琴式部に頼まれた物を届けさせれば、香子はしきりに御礼を言うので、「マツトレス2号の扱い方は更にわからん」と憤怒していた。

「邸内だけでは退屈かもしれぬが……。困ったことがあればイグネルフに全て申し付けよ」

「はい……」

そうは言っても相変わらず、何も要望は言わない。

琴式部が居なければ、本当に何もいらないと言いそうで、生活出来るのか怪しいほどだ。

そういった意味では、転送陣にうつかり足を踏み入れたばかりか、香子の下に行きたいと願った琴式部が異世界でも一緒というのは、香子にとっては良かったのかもしれない。

11・要望

伯爵閣下の「拾い癖」には困ったものだ。

とにかく、戦地で困っていたり、侯爵閣下から押し付けられたりすると、どのような女であれ拾ってくる。

男を拾うときもあるのだが、それは配下の魔将として役に立つが、女は特に戦を好む種族であっても面倒くさい。

伯爵閣下が拾ってくる女、そのほとんどはガレリウドさまの伯爵という地位に目を光らせて猫を被ったものであったり、戦を好まない妖精の子供であったり、忌み嫌われるハーフェルフであったりと、碌なものが居ない。

愛妾という立場を利用して出してくる女どもの要望を聞いていたのでは、身体がいくつあっても足りない。

何せ27人も、居るのだから。

そのくせ、正妻として傍に置いている女も居ない。

こうなっては、いつまでたっても拾い続けてくるのではないかとイグネルフは危惧した。

27人目の愛妾を迎えた二千年前に、「これ以上は拾わないでください」と釘を刺したのだが、時が経つとそういったものは忘れ去られるのだろうか。

侯爵閣下の領土へ突然出かけられた後、帰ってきたと思ったら、また女を拾ってきたのだから。

「中宮さまは退屈なさっております」

「は？」

伯爵閣下より承っているイグネルフ専用の執務室に、マツトレス1号が突然入ってきたかと思うと、意味のわからないことをのたまっている。

このマットレス1号は、2号の侍女だというが、侍女の分際でイグネルフに要望を出してくる迷惑な娘だ。

主人にあたる2号から、直接頼まれたでもないのに、やれ櫛が欲しいだの、香を炊く草が欲しいだの、魔族の世界にはないものを頼んできたりするから、一度異世界に返して必要なものを取りに行かせたのだが、短時間で荷物がまとめられるわけがないと言う。

「何を用意しろと言うのだ」

「木簡を……。文字を書きつけるものがあれば」

「紙のことか？」

イグネルフの執務机には書類とした紙が大量に積まれている。

その書類にチラリと目線がいったのが、マットレス2号の持つ扇とやらが動いて嫌でもわかる。

それにしても、紙が欲しいなどは……。一体、何に使うというのだ。

「紙は貴重なものでしょうから。ただ使いさしでも頂けるのであれば……」

いつもは強気であれが欲しい、これが欲しいというマットレス1号だったが、今日ばかりは何故かしおらしい。

紙が貴重なものとは……。意味がわからん。

ゴミ箱にくしゃくしゃに丸めて捨てた紙が多々ある。

それらを羨ましげに見るといふのは、何とも……。異世界から来た高貴な身分の娘としては、疑いたくなるほどみずぼらしい。

「わかったわかった。後で届けるから、部屋で大人しくしている」

紙ぐらいなら、伯爵閣下に申し立てなどしなくても構わない気が

したが、マットレスたちの世話は伯爵閣下の私財から賄うために、要望があれば伯爵閣下にお知らせすることになっている。

領土からの税金で賄うなどあつてはならないから、当然だ。

マットレス1号を執務室の外に追いやると、溜まっている書類に目を通した。

今までで、一番くだらない要望だな。と、イグネルフは脳裏で思った。

午前中に書類を全て目を通し終わると、この書類の束は伯爵閣下に送られて、承認が得られれば案件が通るようになっていく。

その書類を抱えて、ガレリウスの私室へと向かった。

ノックをし、許可を頂いてから、質素な私室に足を踏み入れる。

この頃は、マットレス2号が伯爵閣下の私室に居ることもあるため、顔を合わせたくもないイグネルフはこのノックで中にマットレス2号が居ないか確認している。

もし中に居たら、ノックの後にマットレス2号が退室してくるか
らだ。

音一つで追い出せるというのは便利である。

「今日の分の書類です」

「ああ、ご苦労」

「それと。……マットレス2号が、要望を出してきています」

「ふむ。香子に困ったことがあるなら、全てお前に言っようにとしたからな。それで、何を頼まれた？」

伯爵閣下はこの頃、マットレスたちの要望を面白がりながら聞いている節がある。

27人の愛妾の要望には、冷たい声で「言っようにしてやれ」としか命令を下さないが、マットレスの言っようことは要望が何か、何

に使うのかまで興味を示して執着されている。

「紙が欲しいそうです。文字を書きつけたいとか」

「紙……？ そのようなもので良いのか？」

この反応は、イグネルフが最初にした反応と同じだ。

だが、伯爵閣下は、そういえばと、何か思い当たる節でもあるのか考えこんでしまわれた。

あのマットレスの要望で伯爵閣下を考え込ませるとは、ただの紙ではないということなのか？

イグネルフは首を傾げながら、ガレリウドの言葉を待つ。

「香子の世界では紙は高級のものだったと聞く。精製技術が高くなかったのだろうな。良いではないか、紙ぐらい。様々な種類のを集めて、ついでにペンやインクなどの筆記具もつけてやれ」

「はあ？ ですが、ガレリウドさま。書くものを与えて、敵対している者に手紙など送られたりしないかと」

「構わん。そもそも香子の書く文字は、我らが使う文字とは違うではないか。誰がそれを解読出来るというのだ？ それに、この世界に我以外の誰が香子を知っている？」

確かに、あのマットレスどもは、文字が読めなかった。

会話は出来るが、それは此方側が会話出来るようにと魔術を使っているからに過ぎない。

「すぐに手配させます……」

渋々と承諾すると、ガレリウドの私室を退室した。

あのように楽しそうな伯爵閣下を、戦以外で見るのも珍しい。

と、イグネルフは自分の執務室に戻ろうとしたら、マットレス2

号が歩いてくるではないか。

ガレリウドの問答に呼ばれたのか、イグネルフに気付くと扇で顔を隠しながらもお辞儀をしてくる。

イグネルフが嫌っているというのを知っているせいか、必要以上にはマットレス1号より声をかけてくることはない。

……というより、マットレス2号はあまり声を他に聞かせるといったことはしないと、伯爵閣下が言っていたような気がする。

「ああ……その、マットレス2号、心して聞け。伯爵閣下の許可が下りたから後で紙を届けさせる」

問答の間に、紙はまだかと催促されては、己が伯爵閣下に報告していなかったようになると思い、仕方なくイグネルフは口を開いた。そうすると、マットレス2号は吃驚したように、扇を取り落しそうになって慌てたのがわかる。

何故、そこで慌てるのか、意味不明だ。

「貴重な紙を……で、ございますか？　ありがとうございます。イグネルフさま」

その答えだけで、やはり要望として勝手に出してきたのは、マットレス1号の方だとわかる。

2号を思っていることだろうが、マットレス1号は、もう少し警戒しなくてはならない。

何せ転送陣を魔力を持たぬ人の身で使って、この世界にやってきたのだからな。

ただ、このマットレス2号に関しては……。

いやいや、いかんいかん。

心を許したりして、うっかり香子などと呼んでは、伯爵閣下を陥

れる者だつたりしたら、私が閣下を諫めなくてはならないのだから。
イグネルフは気を引き締めなおすと、マットレス2号の横を通り
過ぎて執務室に向かう。

すれ違いざまに、マットレス2号の横顔が見えた。

少女から成熟した女性に入る境目ぐらいのうら若い娘の顔。

ほんのりと頬を染めていたのがわかる。

やはり……女というのは、全くもって不可解な生き物だ。

12・問答2

「ガレリウドさま。こちらが注文の衣服でございます」

邸に来客 頼んだ衣服を作らせた仕立て屋が訪れた。

琴式部が、いくつか衣服を持ち込んでいたが、さすがにあれだけ嵩張る唐衣裳装束というのは、そんなに持ち込むことが出来なかった。

そのため、衣服を作る職人を使い、デザインや色目を香子から聞き出して作らせたものだ。

季節によって着る色目が違ったり、柄が違ったりするそうだ。

イグネルフはマットレスなどと簡単に言っているが、その作りや製法はマットレスよりも実に技術のいるものであると知った。

「うむ。ご苦労だったな」

「いえいえ。久しぶりに手の込んだ衣服に、楽しく作ることが出来ました。ところで、このような風変りな衣装、またどちらの愛妾をお迎えに？」

「愛妾ではないのだが。……我が邸に身を置いている貴人にな」

「ほう……。気になって調べたのですが、この衣装は人の和の国の古い民族衣装であるようだ」

「そのようだな。異世界というより、異次元より連れてきたのだ」

仕立て屋は納得したように頷く。

「愛妾というより、……使用人ですか」

「使用人は既に足りている。和国の王の元妃という身分、そのような貴人に使用人になどはせぬ」

「はあ……。まあ、ガレリウドさまの『客人』というからには、珍

しいと思った次第で。人間に着せる服というのは、余り好まないことですが、このような珍しい衣服ならば、また承りますよ」

そういうと、仕立て屋は次の仕事があるとばかりに、客間を退室していった。

残された衣服は、見事に色目や柄の美しい単が数枚。

香子は喜ぶだろうか、それとも……困惑してしまう方が先かもしれないな。

ガレリウドは早速とばかりに、香子の居る別の客間へと赴いた。

ノックをすれば、その物音にもだいぶ慣れてきた様子で琴式部が扉を開けた。

琴式部は、若干きよとんとした様子である。

香子は相変わらず顔を隠したままのことが多いが、世話をすることが多い琴式部は、邸内に慣れてきてからは顔を隠すといったことがない。

最初は初対面というのと、得体が知れないという警戒もあったからだそうだ。

「香子は居ないのか？」

「一刻ほど前に、貴方のお部屋へ行かれたようですが。入れ違いになられたのですか？」

「ああ……。客間の方に……。だが……いや、良い。これは仕立てさせた服だ、柄や色目はそなたらの持っているものとは異なるかもしれないが、近いものには仕上がっていると思う」

衣服の入った箱を琴式部に渡すと、琴式部は目を細めている。

「まあ。良い色目でございます。中宮……香子さまが戻っていらっ

しゃっしたら、早速お見せ致します」

表情を柔らかくした琴式部が、箱を長テーブルへと置いた。

この部屋も、洋室のままであるから、和室のように変えてやりたいものだったが、まだそちらの調度品の仕立ては時間がかかっている。

琴式部は、香子のことを人前では中宮さまと呼ぶことの方が多いようで、もう異世界に来たのだからと香子に諫められて、どのような時でも「香子」と呼ぶようにと言われたそうだが、その癖はなかなか抜け切れないようだ。

イグネルフは二つ名があるなどと、怪訝そうではあったが、中宮の意味が妃に等しい意味であると知ると、それほど煩くは言わなくなってきた。

衣服を渡すと、今度は私室に戻るべく足を向ける。

それにしても、香子がガレリウドの私室を尋ねるといっものは珍しい。

普段なら、呼ばなければ来ないものだ。

香子の世界では、男の方が女の下へと通う文化があるという。

女はずっと邸に籠りがちなのだと。

それでは退屈だからと、香子は宮中に入内しても、時折花見や寺や神社にお参りと称して出かけていたそうだ。

よくあることだったから、香子が花見と称して出かけても、自害するなどは誰ひとり思わなかったようだ。

私室の扉を開けると、香子が問答をするときにように、柔らかなソファアーに横になっている。

「香子？」

声をかけてみたが、眠っているようだ。

私室を出たのは2時間ほど前、イグネルフの執務室で書類と仕事の話をしてから、15分ほど前に仕立て屋を出迎えた。

琴式部は1刻ほど前に私室に訪れたというから、本当に一時間もこの私室で待っていたというのだろうか。

長く艶めいた髪がさらりとソファアーにしなり、眠っているせいで扇が顔から外れてソファアーの下に転がっている。

扇を拾いあげて、ソファアーで横になる香子の顔を見やる。

少女のような少しあどけなさが残る女の顔。

触れてみたいとばかりに、頬へと手を伸ばすと、髪と同じくしつとりと柔らかな肌。

不意に、その瞳がパチリと開いた。

「きゃ　っ!？」

吃驚したように、ソファアーから身を起こした香子の袖が、素晴らしい速度で顔を隠した。

琴式部と違って、顔を見せる習慣が殆どと言ってない香子には、まだ慣れるということが無理なようだ。

「すまぬ。待たせてしまったようだな」

「っ……。ガレリウドさま……。あ、あの。いつから……」

「つい先ほどだ。そなたこそ、一時間も前から待っていたのだろうか?」

寝起きで頭の回転が鈍くなっている香子を宥めながら、ちょうど香子と直角にあるソファアーへと腰を下ろした。

対面で話すということが常であるが、わざと直角に座ったのはどこまでパーソナルエリアを許しているのか測るため。

「すみませぬ。……突然に、来てしまって」

「いや。構わぬ。ここ暫くは査察で出かけていたから、香子とゆっくりと話すことが出来たのは一週間ぶりであるう」

「はい……。御仕事の合間、申し訳ありません」

「良い。それで……。何か用があったのではないのか？」

先を促すと、香子は小さく首を傾げる仕草。

「いいえ。何も……」

「は？」

「琴式部が部屋の清掃をしたので、邪魔になるわたくしが、こちらへ逃げてきたのです」

そのようなことは一言も琴式部から聞いていないが。

どうやら、勝手に抜けてきたというより、本当に逃げてきたようだ。

邸内で香子がうつろつける場所と言えば、客間か、ガレリウドの私室ぐらいなものだ。

「そうか。では、暫くここに居るが良い」

「でも、ガレリウドさまのお仕事は？ お邪魔になるようなら」

「邪魔だと思っぐらいなら、邸になど留め置かぬ。それに、今日の分は終わったところだ」

正式には、イグネルフに書類の束を押し付けてきただけであるが、そのほとんどは領土内の収支報告の束であるから、そういった細かな集計は会計の得意な者に任せるに限る。

「で、では……。あの。わたくしが、ガレリウドさまに、質問をしても……。宜しいでしょうか？」

「そうだな。いつも我が聞いてばかりであった、そなたの気が済む

まで聞くが良い」

そういうと、香子がしゃっきりと背筋を伸ばして、嬉々とした様子が伝わってくる。

一体、何を聞いてみたいと思っているのか……内心で、ガレリウドも楽しみにしている。

「では、ガレリウドさま。……ガレリウドさまは、どうして
7人も愛妾がいらっしゃるのですか？」

香子の問いは、ガレリウドを数秒絶句させた。

13・問答3

「それを誰から いや、イグネルフから聞いたのか？」

ガレリウドは額を抑えながら香子に尋ね、拾い上げたまま持っていた扇を差し出した。

香子は扇を受け取るうと、手を伸ばそうかと身じろいだが、中々伸ばそうとはしない。

手を伸ばせば、ガレリウドに顔を晒してしまうからだ。

既に、寝顔を見られてしまったとはいえ、自ら晒すといった行為はしたくないようだ。

仕方なく、ガレリウドはソファから立ち上がって香子に背を向けた。

扇を取ったのだろうと思われる衣擦れの音と、扇を開いた紙の音が聞こえた。

「 もう、お座り下さって良いですよ」

香子の声に、ガレリウドはソファに座りなおして、コホンと咳払いをした。

すっかり扇で顔は覆われてしまって、袖よりも無機質な扇は柄は確かに美しいのだろうが、味気ない。

扇を渡さなければ良かったかもしれないと、ガレリウドは少し後悔した。

「正確にはイグネルフさまが対応していたお客様が、仰っております」

「どうということだ？」

「イグネルフさまの執務室を通りかかった際に 『ガレリウド伯

の27人の愛妾の中でも、エンディリシカが一番魔力が強い。そこに違いないだろう」と、とても大きな声で仰っておられました。御姿は見ておりませぬので、どなたが仰ったのかはわかりません」

イグネルフの執務室に訪れて、そのようなことを言うといえば、配下魔将ではなく、別の伯爵級の魔族がエンディリシカを戦力として借りてきた、ということだろうか。

エンディリシカは、ガレリウドの愛妾の中でも特に魔力の強い女で、戦となると嬉々としてついてくる変わり者だ。

実力もあるからこそ、戦への従軍には好きにさせている。

ガレリウドが任されていない戦へも、勝手に参加しているようで特にレヴィンとも親交がある……とすれば、またレヴィンがエンディリシカを借りてきた可能性は高い。

「そうか……。それで我に愛妾が居ることを知ったのだな」
「それだけでなく、わたくしが最初にここへ来た折も、イグネルフさまが『また愛妾にする気か』とお聞きになっておられましたし、ガレリウドさまは御子が授かる方法をお聞きになっておりましたから、少なくともご結婚されているものでしょう」

結婚。

その単語に、ガレリウドは笑ってしまいそうになった。

愛妾の意味を、香子はどのように捉えているのだろうか。

魔族に婚姻の概念というのは、とても薄い。

人のように役所に届けを出すわけでもない、誰が誰と結ばれよう関係ないのだ。

だが、そういうった魔族にはない概念を持ち出してくる香子は面白い。

「どうして27人も居るのか、だったな……。主に9人は迎えた当

時身寄りのない子供や忌み嫌われた女、9人は戦がしたくて溜まらずついてきた女、9人は侯爵閣下に宛がわれた番い候補や手に負えない戦好きの女だ。行き場のないものを保護して置くには、それなりに理由がなくては置けないものたち故に、私の『愛妾』として置いている」

「無理やり、置いているわけでは……ないのですね」

「中には『愛妾』と言いながらも独立して生活している者も居る。数千年も経てば、形として置いても廃れるものだ。ただ、それを利用しようとする者も居るのも否めないが」

時折、様子を見に行くものも居れば、全く見ていない者も居る。

愛妾と言いながらも、そこに普遍的な「愛」は存在しない。

「しかし 意外だな。香子がそのようなことを聞くとは……」

側室として愛妾と同義の身であったから、気になったのだろうか。もっとも、香子は中宮としてまで帝の寵愛を受けた身であるなら、愛妾の不憫さというのものも知っているからか。

そう考えていたガレリウドだったが、香子の答えは意外なものだった。

「以前にガレリウドさまが、わたくしの伴侶のことをお聞きになったから、反対に聞いてみただけでございます」

中宮の意味がよくわからなくて、詳しく聞いたことはある。

政略結婚として結ばされた香子にとって、帝という伴侶はただ子孫を残すためだけの道具のような扱われ方であったとか。

「聞いて面白いものではないと思うが……」

「いいえ。ガレリウドさまと、わたくしは誰かを愛することを知ら

ずに、伴侶を迎えた同士ということがわかりました」

またガレリウドが咽そうになった。

女というのは、どうしてこう……愛だの、恋だのという話になると花が咲くのだろうか。

顔を晒すことは恥じらうのに、この手の話は随分と強気なことだ。ほんの少し意地悪をしてやろうと、ガレリウドは香子を困らせる質問をするべく、投げかけてみた。

「香子。我がそなたを愛妾にすると言ったら……どうする？ 我は侯爵閣下に伴侶を迎えて子を為せという命令を受けた後、そなたの声を聞いて邸に迎えた。この意味がわかるか？」

また道具のように扱われると泣くだろうか。

それとも、怒るだろうか。

「ガレリウドさまは、……とても変わったことを仰いますね」

「変わったこと？」

「はい。わたくしは、異国から離れることが出来るのであれば、この身がどうなるかと厭わない覚悟でおりました。ガレリウドさまが、望むのであれば恩返しができます」

「そこに、そなたの望む愛だのというものがなくてもか？」

質問するべきではなかった。

香子に惹かれていると気付いた時より、手に入れたと思って今までのように『愛妾』として置きたいわけではないのだ。

香子の答えは、ただ恩返しという身を捨てようとした自害と同じ形。

そのようなことをさせたいわけではないのに。

「あら。わたくしはガレリウドさまをお慕いしておりますが　ガ
レリウドさまは、わたくしを好いておられぬのですか？」

今度こそガレリウドが咽たのは言うまでもない。

14・問答4

今、この目の前にいる女は何をのたまったのだろうか。

空耳とはいえないぐらいに、はつきりと聞こえた。

己を慕っている。そしてまた、己が香子を好いているのだからと聞いてきたのだ。

ガレリウドは改めて香子に向き直ると、扇の下に隠れている顔をじつと見つめた。

「そなたは……我のどこを気に召したというのだ。少なくとも、助けた恩だけで好いたわけではあるまい」

「はい。ガレリウドさまは文を書く道具や、異国の装飾品などをくださいました」

「それだけで？」

「それだけで十分でございます」

ガレリウドの目が点になりそうだった。

香子の国では、男性が歌を贈り続けて女性を口説くというのが、歌の代わりに物を贈ったと捉えたようだ。

つい先ほども、衣服を琴式部に預けてきたばかりだ。

だが、確かにどの時代でも男が女に物を贈るというのは、下心が少なからずもあるからだ。

それは色々な意味を含んでいる。

純粹に好いて贈るだけではなかったりすること、魔族の世界では多々あることだ。

そういった意味でも、香子は純粹すぎた。

「他の女にも物を与えてはいるぞ?」

「それはガレリウドさまの『愛妾』のお話でしょう。ガレリウドさ

まは、わたくしを『客』だとおっしゃいました。ただの『客』にお贈りするようなお品でしょうか？」

「生活に困らないようにするためのものであるう」

「ですが、高価なものであったり、生活には必要ではないものもあります」

「そなたが喜ぶであろうと思つて贈つただけだつ！」

つい本音が出てしまった。

不意に香子が持つていた扇を畳んで、袖さえも顔から外して素顔を晒した。

眠つていたときにはわからなかった黒い瞳は、恥じらいのせいか潤んで、頬は紅潮している。

あどけない少女から脱却しつつある娘の顔つき。

誤魔化すように繰り返した問答の答えにある毒気を抜かれた。

「香子。そなたに惹かれておることは確かだ。だが、そなたはこの世界に来てまだ数週間」

「魔族は人間を嫌うものだと、イグネルフさまから聞きました。それをわかつていて連れてきたのは、ガレリウドさまではありませんか。嫌う存在なら、何故助けて連れ去つたのですか？」

「っ……それは。ええい、わかつたわかつた。そなたには負けたわ」

降参とばかりに肩を竦めると、ガレリウドは続けた。

「侯爵閣下に急かされてはいるが、二千年前にこれ以上愛妾を増やすなどイグネルフに釘を刺されておるのでな。好いているからとて、そなたをそう簡単に愛妾にするわけにはいかぬのだ。だが、そなたには傍に居てほしいと思う」

「いいえ。その答えだけで十分です。これは問答、なのですから…

…お答えを頂いただけで、十分なのです」

再び、香子の扇が開かれた。

だが、顔を隠されることはなく、ぱたぱたと仰いでいるのみ。

まるで、気にしないようにとでも手を振られているようなものだ。表情には哀しみがあるわけでもなく、漆黒の瞳は何を考えているのか色を全てシャットダウンしている。

「質問はまだ終わりじゃないのですよ、ガレリウドさま。わたくしがこの世界で生きる上で、知らねばならないことが沢山ありそうですから、お答え頂かなければ困ります。稚児でもわかるように説明なさってくださいましね」

何か吹っ切れたような物の言い方。

香子は続けて、この世界の仕組みや、魔族について事細かに聞いてきた。

異世界に、馴染もうとしている。

それに答えてやらねばならないだろう、香子を連れてきたのは、ガレリウド自身なのだから。

全く、見ていて危なっかしい娘ではある。

物を贈ることの意味を疑うこともせず、ただ純粹に受け止める。

「あの声に答えたのが、我でなければ、そなたは利用されていたかもしれないぬな」

「? 何のことですか?」

「いや 何でもない」

ガレリウドは小さく苦笑すると、香子の質問に次々と噛み砕いて答えることにした。

ただ一つ、変わったのは香子を客としての扱いではなく、寵愛を

傾けられる者としての扱いに変わったこと。

15・紅髪の魔将

「ガレリウドさま。 エンディリシカが、戦から帰還したようですが……」

イグネルフがしかめっ面で、私室に入ってきた。

ちょうど、香子と茶菓子について談義していた折のことだ。

いつもなら、香子を追い出すための合図としてノックをすることが多いのだが、今日は唐突である。

「が、……何だ？」

「はあ。ガレリウドさまに目通りしたいと…… エントランスに陣取っております」

エントランスからは、香子を退室させたら、廊下を歩く香子の姿が見えてしまうだろう。

そうでなくとも、エンディリシカは人間を嫌っている。

好戦的で戦帰りに寄ったとなれば、随分と殺気立っているに違いない。

そういった意味では、香子を見た瞬間殺してしまいそうであるからに、イグネルフがノックをしなかった理由がわかる。

「わたくしはお部屋に戻ります」

「いや。そのままが良い。いずれは、そなたの存在を知らしめねばならぬ。だが その前に」

ガレリウドは執務机の引き出しより、小刀を手にすると徐に自分の掌を傷つけた。

どうするのだろうか、見ていた香子は小さく声をあげて扇の下か

らでも目を閉じて。

イグネルフはその意味がわかったのか、目を見開いて驚いたかと思うと、複雑に表情を変えてガレリウドの前に立ちはだかった。

「なりませんっ、血の契約など。ガレリウドさま、この娘は人間です」

「だからこそ施さねばならぬ。イグネルフ、お前はエンディリシカを私室に呼んだら、琴式部が部屋から出ないように言い含めて来い。邸内で死人を出したくなければな」

返答に詰まったイグネルフは、フンッと鼻を鳴らすとガレリウドの私室を退室していった。

ガレリウドは小刀を片づけると、血を見て怯えた香子の傍へと寄り添った。

魔族といえど、その血の色が変わっているわけではなく、人間と同じ赤い色をしている。

青や緑といった色は物語の中で魔族が怖いと示すための虚偽にすぎない。

「香子。目を閉じたままで良い。時間がない故、そなたへの説明は後になるが……口を開けよ」

香子の扇を取り払い、ガレリウドは傷ついた掌から滴る血を開いた香子の口へと落とした。

飲み込め と、命を下して傷ついた掌を、反対の手を翳すことで傷痕を跡形もなく癒した。

血の契約。

それは、魔族が眷属として対象を配下に置くことを意味する。

配下に置かれた対象は、血を与えた者を主として庇護の保証の元、主以外の魔族からの干渉を持たない。

干渉されるとすればガレリウドよりも強いとされる魔族ぐらいなものだ。

その実力は公爵以上と噂されるガレリウドであれば、そのあたりに居る伯爵や侯爵クラスの魔族でも干渉することは出来ない。

故に、血の契約は鉄壁の守りにもなる。

香子の喉が僅かに動いて飲み込んだのを見届けると、ガレリウドは契約の呪詛を言葉に乗せて、香子の頬を撫でる。

「普段通りにしておれば良い。エンディリシカは血の気が多い愛妾ゆえに、そなたに危害を加えようとするかもしれないが、案ずることはない」

そこまで言うてから、私室の扉が勢いよく開かれた。

背の高い、戦乙女とも言える戦装束に身を包んだ長身の娘が紅の髪を片手でかきあげながら、ヒールの高い軍靴を鳴らして部屋に入ってきた。

「ガレリウド。貴様、戦を休んで何をしているかと思えば、邸で何を」

苛々とした口調で入ってきた娘、エンディリシカは行儀悪くもソファーに片足を乗っけて、ガレリウドを睨み付けた。

だが、ガレリウドが触れている黒髪の娘に目をやり、なんだこの娘は？ と、怪訝そうに顔を顰める。

戦に出ない代わりに、このどの馬の骨ともわからぬ娘を囲って遊んでいたというのか？

あの戦ばかりしか考えないガレリウドが。

しかも、邸にわざわざ置いている、だと？

「落ち着けエンディリシカ。その様子では、戦に勝ったのであろう

「アタシがこうして居るのだから当然だ」

エンディリシカが負けたのは、侯爵閣下の命令でガレリウドの軍に攻め落とされたときだけだ。

魔術を使って将兵を粉砕することを好むエンディリシカは、たった一人無防備に突撃してきたガレリウドに、幾度となく火球の魔法を投げつけても悉く避けられ、懐に飛び込まれて槍を突き付けられた。

接近戦は得意としないエンディリシカにとって、間合いに飛び込まれては、魔法を放つための身動き一つだけで殺される。

だが、ガレリウドはエンディリシカを殺すことはせず、その能力を買って生け捕りにした。

反抗的なエンディリシカは、最初はガレリウドの下で戦をすることを拒んだが、従軍しているうちにガレリウドの戦ぶりに惚れて、ここ数千年は戦ときけば嬉々としてついてくる。

功績を残せば、エンディリシカの名は広まり、ガレリウド以外の魔将から戦の話を持ちかけられ「戦に出たければ好きにすれば良い」というガレリウドの言葉に、様々な戦に出ている。

今では勝利を飾る紅髪の魔将などと異名をとる程だ。

「この娘はなんだ。答える、ガレリウド」

「イグネルフから聞いているだろう。『客』だ」

「ただの『客』に貴様は女とみれば誰彼かまわず接吻をするのか?!?」

していない、断じてしていない。

頬に手をあてただけで、そこまで勘違い出来る想像力の豊かさは、女性特有のものだろうか。

それに、誰彼かまわず接吻するような節操なしではない。

……だが、事実上は愛妾が27人居るといって、節操はなさそうに見えるかもしれないが。

香子の顔を己の胸に抱かせて隠しながら、奪った扇を香子に返してやりながらエンデイリシカに向き直った。

「その声を荒げなくとも聞こえている。『客』の前だと言うのに、そなたは変わらず血の気が多いな。……この娘は香子だ。和国の平安期より希求の声を聞いて連れてきた」

ガレリウドが香子を紹介すると、エンデイリシカは香子が持っていた扇を払いのけ、顎を掴んで顔を上げさせた。

香子は怯えと不安の混じった表情で、潤んだ目をエンデイリシカに向けていたが、羞恥に耐え切れずに目を伏せてしまったようだ。

それを見たエンデイリシカは、鼻で笑うと乱暴に顎を離して香子の長い黒髪を掴んだ。

「あんた、人間だね。アタシは人間は大嫌いだね、ガレリウドが連れてきたと言えど、あんたがガレリウドの戦の邪魔をするっていうならこの場で死んでもらうよ」

おおよそ、予想のついていたエンデイリシカの言葉にガレリウドは、嘆息した。

人間と知ると、エンデイリシカは問答無用で殺しにかかっている。毛嫌いしている理由を何度か訊いたが「胸糞悪い連中だからだ」と言っただけを言わずに、殺している。

ガレリウド自身も、母が人間だったとしても魔族の世界で育つために、人間に対しては儂く短命の存在は気にも留めていなかったが、香子と知り合ってからはその小さな存在に興味を示すようになった。

香子は恐怖のせいなのか、一言も発することがなく袖で顔を隠し

ている。

「命乞いをしない所は他の人間よりマシだね」

そう言つてエンディリシカは得意の火球を掴んだ髪から燃え上がらせてしまおうと、魔力を展開し始め。それは、急速に魔力を跳ねのけて、パリンというガラスが割れたような音を立ててエンディリシカを退けた。

吃驚したようにエンディリシカは自分の掌を見つめ、鬼の形相で香子の首元を掴みかけた所で、ガレリウドがエンディリシカにいつの間にか手にしていた槍を喉元に突き付けた。

「私の『客』だと言つただらう。勝手に殺すことは許さぬ」

低く凄みのある声音でガレリウドがエンディリシカを諷めると、紅髪を揺らしてエンディリシカは身を引いた。

払いのけた扇が床に転がってるのを見ると、納まりきらない怒りに任せ、軍靴のヒールで扇をぐしゃりと踏みつぶした。

「つ……、扇……」

それを見た香子が蒼白な顔で、エンディリシカを睨むと背伸びをして、紅髪の魔将と恐れられてもいる女魔将の頬を平手打ちにした。

16・紅髪の魔将2

平手打ちにした掌は赤く腫れて、震えてしまっている。

香子の扇は、異世界から持ち込まれたもので、この世界で言えば二つとない一点もの。

それを踏まれたとなれば、その怒りはわからなくもない。

が、頬を叩かれても動じない紅髪の魔将が、香子を睨み付けた。

エンディリシカの視線は金縛り。

その紅の瞳を見ただけで手の指一本すら動かすことが暫くの間出れない。

動けないままにした所で、焼き討ちにしたり、剣でいたぶって殺すこともエンディリシカの得意技の一つ。

だが、ここは戦場ではなく、ガレリウドの私室。

女の不毛な……むしろ、一方的な戦いは部屋主のガレリウドによって諫められた。

「弁えよ、エンディリシカ。そなたが人間を嫌っているのは知っているが、香子を殺すことは許さぬ。その娘は私の番にするつもりなのだから」

その言葉に、エンディリシカの興味は身動きのとれない香子から、ガレリウドへと移った。

血の契約は絶対的な死からは防御してくれるが、そうではない魔法には防御干渉はしない。

人の身には余るほどの金縛りの呪は、ガレリウドが解呪を施しても魔術に耐性のない香子には暫く身体が麻痺したように動くことが出来ず、ガレリウドは香子を抱き上げて己のベッドに落ち着かせるようにして横たわらせた。

焦点は合っているのか、わからない。

恐怖というよりも、哀しみに漆黒の瞳は涙に濡れている。

休んでいるように言い含めて、頬に零れる涙を指先で拭い、慈しむように頭を撫でると天蓋のカーテンを閉めた。

エンディリシカは不服そうにガレリウドの振る舞いを見やると、潰れた扇を拾い上げた。

見たことのない造りで、薄い和紙には淡い紫の木……藤が描かれ、その横には墨字で和歌が書き綴られている。

和歌はエンディリシカには読み取れない文字で構成されているために、何と書かれているのかはわからない。

軍靴で踏まれた藤には穴が開いてしまっている。

脆い紙で出来ている装飾品というのは珍しいものだが、それが高価なものであるとも思えない。

開いたままの扇はひしゃげたままで、折りたためるようになっていたが、折りたたんでみても不恰好になった。

「番と言ったか、ガレリウド。それは、あのジジイがあんたに、あの娘と番になれとでも言ったのかい？」

エンディリシカは、ガレリウドの愛妾の中でも三番目に迎えられるた。

そのために、彼が他に次々と愛妾を迎えたことは知っている。

ジジイと称した、ガレヴァーン侯爵に宛がわれた娘が何人も居ることを見てきた。

だが、それらは全て魔族の娘であったし、ガレリウドは全く興味を示さなかった。

それを、今回は自ら番にするなどと、この戦いの権化は事もあるうかと惚気たのだ。

「侯爵閣下には確かに命を受けている。そなたが戦に出たいと願っても、私の軍は我が番を見つけて子を為さなければ出られないのだから」

「その話は聞いたよ、あの陰険伯爵からね」

陰険伯爵というのは、レヴィンのことだ。

エンディリシカと同じくして魔術を得意とするが、その戦いぶりには敵味方関係なくという冷酷非道な面があり、味方は味方として扱うエンディリシカにとって、レヴィンの戦の指揮の仕方は不満だという。

ガレリウド自身も、快くは思っていない。

「別にアタシは戦が出来ればあんたが誰と懇ろになろうが関係ないが、人間ってというのは気が進まないね」

「そこまで嫌いになる理由を、我は知り得ていないのだが」「ふんつ。人間は信用ならないのさ。簡単に裏切る。あの娘とて、あんたが伯爵と知って利用しようとする女狐かもしれない」

そのような娘なら、既に愛妾の中でも虎視眈々と目を光らせている女が他にも居る。

と、ガレリウドは思ったが、今は口に出さないことにして、不恰好に閉じた扇を開けた。

描かれた穴の開いた藤は、香子が宮中で暮らしていた部屋の傍にある木と同じもの。

和歌は香子が名も知らない公達から送られた和歌だと、つい最近教えられたものだ。

香子は歳の離れた帝の側室として入内したものの、そこに政治的な意味合いはとて強く、帝に対しても心を開かなかつた。

閨で身体を奪われて、娘を身籠ったとしても 娘を産んでも、帝に慕う気持ちはないままに崩御し、産んだ娘が伊勢斎宮となって

からまた哀しみと憂いの日々を、藤壺で過ごしていた折に、そつと御簾の外にこの扇が和歌と共に置かれていたという。

不遇な中宮として失意の中に居た香子を、その扇の絵と和歌が心を和ませたという。

恐らく、香子はその扇を贈ってくれた男を忘れられないのであろう。

ガレリウドは話を聞いて、ほんの少し嫉妬を覚えたものだ。

「ともかく、そなたが干渉することではない。香子にまた危害を加えるのであれば、我はそなたを領地から追い出し、戦には連れぬ」

エンディリシカは戦好きの娘。

そこまで言えば、人間嫌いのエンディリシカでも、好む戦いに出られないのは魔将として意味を為さない。

「……フン。わかったわかった。『今は』娘には手を出さないよ。だが、忠告はしておくよ。あんたが娘に裏切られて、万が一この地を奪われでもしたら、その時はあの娘を殺す。それで良いかい？」
「万一にもないと思うが……良からう」

ガレリウドが言うと、エンディリシカは満足そうに身を引いた。

そして何事もなかったかのように、邪魔をしたな、とガレリウドの私室を出ていこうとするのだから、嵐のような魔将だ。

ただ、こうして言い含めるだけで去っていくエンディリシカの思い切りの良さや、サバサバした性格はガレリウドとしては気に入っている。

ぐちぐちといつまでも縋るような女の醜い気質は感じられない所が良いのだ。

「ああ、そうだ。忘れていたが、あの陰険伯爵から渡してくれ

と頼まれたんだった」

出口の扉にまで手をかけてから、エンディリシカが振り返った。ほら、と投げてよこしたのは、手紙。

「当然、中身は知らないがね。直接渡してくれと頼まれたから、何か重要なものなんだろうけど。じゃ、アタシは確かに渡したからな」

今度こそ邪魔をした、とばかりにエンディリシカは部屋を出て行った。

後に、深く長い溜息をガレリウドがついたが、その嘆息は香子には聞こえただろうか。

天蓋のベッドを見やったが、物静かなものであった。

17・血の契約

嵐のようなエンディリシカが去っていくと、ガレリウドは天蓋のベッドのカーテンを開けた。

開けた音に気付いた香子が隠れるように身体をベッドの上で傾けたが、思うように動けないためにシーツに潜ることも出来ず、ただ傾いた身体を縮こませただけになる。

長く艶めいた黒髪が揺れ白いシーツにはよく映える。

ガレリウドはその髪を梳くようにしながら、背けられた顔を自分の方に向かせた。

「眠ったフリというのは、そなたには無理であろう。このような寝台では落ち着かぬはずだ」

香子と琴式部を住まわせている客間にあったはずの寝台は、初日のうちに外に運び出された。

何でも安心して眠れないのだ、寝返りを打ったときに落ちるような台座では怪我をすると、琴式部に酷く怒られたものだ。

それを思い出しながら、告げると、香子は目を開きはしたものの、何度か瞬きを繰り返した。

泣き腫らして赤くなつた目は、出会ったときを思い起こさせられる。

ガレリウドは香子を抱き起して、己の胸へと抱き寄せた。

「辛い思いをさせた。そなたを娶うことで、恐らくは　今以上に辛い思いをさせる。そうわかつていて、『客』のままにさせたのも、私の我儘」

「いいえ。ガレリウドさま。わたくしは……過去に縋っておりまして。この世界に来てから……ガレリウドさまを慕う上では、あのよ

うな扇を持っているべきではなかった」

「いや、扇はそなたの心の支え。魔族の世界の中で心細いであろう」

そうは言ったが、エンディリシカが踏みつぶさなければ、嫉妬に駆られたガレリウドが扇を取り上げる日が来ていたかもしれない。

ただ、あまりにも大事そうにしているために、取り上げたら泣いてしまうのではないかという危惧もあった。

人間を征服することは簡単だが、手の内に収めて自分の好きなように扱いたいわけではない。

泣かせて、服従を強いさせて、己に仕えさせるために傍に置きたいのではないのだ。

何しろ、この娘ときたら見ていて飽きない上に、戦の権化であるガレリウドを『慕う』とまで言いだした。

戦をしているガレリウドの姿を見たことがないとはいえ、筋肉質の身体の至る所には戦傷があり、万年雪のように崩れない仏頂面である。

畏れられることの方が多い外見だとガレリウド自身でも理解しているが、香子がガレリウドの顔を見て怖がったことは記憶にない。

むしろ、面と向かって顔を見ただけで恥ずかしがってしまうのは香子だ。

「ガレリウドさま。……血の契約とは、何なのでしょうか」

「そうであったな。血の契約とは、血を分け与えた者を眷属として配下に置く呪法だ」

「眷属……？」

「そなたの世界で言えば親族のようなものだが。血の契約は主従の証、酷なことだが……そなたは私の傍から生涯離れぬことが出来なくなる。その代わり、我以外の魔族から危害を加えられることはない庇護の証でもある。万能ではないが、血の契約をしていなければ、そなたはエンディリシカに命を奪われていた」

「理解するのに難しいお話でございますが……わたくしは、また助けて頂いたのですね」

魔法だの、呪詛だのといったことは香子は疎い。

魔力の持たない人間なのだから仕方がないことだが、それを噛み砕いて説明するというのはガレリウドにとっても難しいことだ。

魔族の生態についても、人間と根本から生の意義が異なり、死の定義も異なる。

「助けたと言えば聞こえは良いが、そなたを縛る鎖でもある。我が『命令』とすれば、そなたは心で嫌がっていても従わねばならなくなるのだ」

「……大丈夫です。ガレリウドさまは、わたくしの嫌がる命令などしませぬ」

「なっ……！　なんだ、その宣言は？」

「違うのですか？　わたくしの嫌がるようなことを、ガレリウドさまは今までしておられないのですし。それに……そのお顔は、とても困っておられるようですから」

仏頂面の微細な表情を読み取った香子に言い当てられ、ガレリウドは押し黙った。

多かれ少なかれ人間という身で魔族の世界で生きるとなると、血の契約は必要になる。

一部の魔族は人間を眷属にし、奴隷のように使わせている者も居るといふ。

そのような扱いにはしたくなかったが、形の上では眷属としなければ、香子にはエンディリシカ以外の魔族にも今後人間を毛嫌いの者から、殺される危険性は大きいにある。

「コホン。そう、だな……そなたの嫌がるというより、極力命令な

どは出さぬ。弊害があるとすれば、私の傍から離れられぬこと。血の契約をした者は、定期的に契約主の体液を摂取せねば狂気に犯されて、異形となって死ぬ」

「定期的……？ 体液というのは、その……ガレリウドさまの、また血を頂かなくてはならぬのですか？」

血を見て狼狽していた様子であったから、香子が苦手そうだといいのは理解できた。

「血液でなくとも、唾液でも汗でも涙でも 精液でも。そなたに分け与えることで、気を静めるのだ。そなたにとっては、不遇なことであるかもしれぬが……」

口付けをすることが一番手っ取り早いといえば手っ取り早いだが、何しろ顔を間近に合わせるだけでも恥ずかしくて背けてしまう香子に、それを強いるというのは難しそうである。

いずれは妻にして、子を為してなどと願ったが、それすらいつの日になるか怪しい。

その前に正式に愛妾として娶らなければ、イグネルフの小言が炸裂しそうで、問題は山積みだ。

「ガレリウドさまの、……血を頂くというのは。これ以上ガレリウドさまの身体に傷をつけるわけにはいきませぬ」

「傷つかぬ方法は口付けか、性交しかないぞ」

「はい……。わ、わたくしとて……既婚の身でしたから、その口付けは、したことがあります。お慕いしているガレリウドさまが相手なのですからっ、あのっ……それで良いのなら」

しどろもどろになりながら、ガレリウドの胸に抱かれたまま赤面している。

その様子があまりにも可笑しく、そして可愛らしく映ったガレリウドは、ほんの少し表情を柔らかくすると赤面した香子の顎を持ち上げた。

びくつと肩から震えて、伏し目がちになる漆黒の瞳は今にも泣きだしそうである。

確かに既婚者ではあるのかもしれないが、この初々しさは恥じらいを持ち合わせた文化の賜物だろうか。

香子の言葉に、ガレリウドの中で押し留めていた想いの箍が外れた。

「その言葉、後悔するでないぞ」

ガレリウドは宣言すると、香子が口を開く前にその唇を己の唇で塞いだ。

しつとりと濡れた唇は柔らかく、香子が目を閉じたのを見やると顎を掴む手は頬へと移り、愛おしそうに撫で上げながら、耳を撫で首筋へと降りて再び頬に舞い戻る。

その間にも舌で割り開かせた唇の隙間から、香子の口腔を舌が蹂躪して征服する。

ガレリウドの衣服の袖を掴んだ香子の手指の力が抜け落ちてシーツに落ちていく。

唾液を与える行為とすれば既に十分であったが、香子の思考を真っ白に染めかねないほど、長く執拗に重ね合わせた口付けが、息継ぎに苦しそうになった様子を見兼ねて離れては、息が整ったところで何度も繰り返す。

香子の身体に残る麻痺は消え去っていたが、ガレリウドが与える口付けの悦でベッドの上から動けそうになく、天蓋のカーテンは部屋主であるガレリウドによって再び閉ざされた。

18・血の契約2

身体が気怠い。

と、目覚めたときに感じた。

エンディリシカ金の縛りは解けていたが、この気怠さの理由は別のところにあると、香子の身体が知っている。

情後の倦怠感。

だが、いつもと違うのは隣で寝ている相手が帝ではなく、ガレリウドであること。

そして、全く動けそうにないこと。

薄い天蓋のカーテンから見える窓の外は夜闇に包まれているようで、一体何時なのかわからない。

帝との情事は淡泊で、ただ子を為すだけの行為でしかない。

夜分に部屋に訪れて肌を重ね、夜明け前には帝が帰られ、後朝の歌が届く。

帝にとっては寵愛しているように見せかけて、世継ぎを孕ませることが仕事と化していた。

香子が入内したのは、帝に皇子がおらず、既に四十を超えていた帝の中宮や数多の女御、更衣も年老いており、それまで在位していた中宮が病で臥すと、香子の父が適齢期となった香子を帝と結ばせて、皇子を為すようにと進言したからだ。

三日三晩続く結婚の儀で、帝に閨を躰けられたが、その作法とガレリウドの情事は全く異なった。

香子が宮中で覚えた閨は痛くても声をあげず、抵抗せず終わるまで我慢するだけのもの。

ガレリウドとの閨は、恥じらいを暴かれて甘美と艶を含んだ声音を響かせ、幾度も悦楽に溺れさせられた。

後朝の歌はないけれど、閨の中で何度もガレリウドに言葉にされて辱められた。

いつ終わるのかと思うよりも、意識を先に失くしてしまったのは香子の方で、後で怒られるのではないかとそわそわし、ガレリウドの様子を伺った。

殿方の寝顔を見るのは初めてで、伯爵級の魔族というガレリウドは、気苦労も多いのかいつも表情が強張って、時には眉間に皺が寄っているのだが、寝顔は至って穏やかで皺一つなく人間と変わらない。

魔力のあるなしを除けば、魔族も人間も変わらないのではないかと思っただが、魔族は人型をとれる種ほど高位で、原型は鳥であったり、剣の化身であったり様々なのだと言う。

人型は生活しやすいという点で、その形を留めているだけに過ぎず、魔力が尽きたり死に近い状態になると原型に姿が戻って、やがて塵と化して消えてしまう。

だからガレリウドは香子が死んで輪廻転生を望んだときに「死すれば無だ」と言ったのだ。

意味を理解するまでに、数日かかったものだ。

「……そのように見つめられると、私の顔に穴が開きそうだな」
「ッ！」

ガレリウドの目は開いていないのに、囁かれて温かく大きな腕が香子の背を抱いた。

ゆっくりと、その目が開いて、口元は口角が僅かに吊り上っている。

ガレリウドの肌と触れ合うと、また抱かれてしまうのかと香子の顔が赤面して手で顔を隠そうとすると、ガレリウドの唇が手指の先を捉えた。

それだけで香子の身体が震えた。

身体に記された記憶が、ガレリウスの触れ方一つを逐一に思い起こされる。

だが、それ以上、ガレリウスは戯れようとはしなかった。

「夕飯の時間を随分過ぎてしまったから、琴式部に怒られておいた。そなたの分の夕飯も、私の部屋に運ばせてあるが……」

「琴式部……が？ あ、あの……式部が、お部屋に来たのですか？」「来なければ怒られまい。揃いも揃ってイグネルフにまで小言を言われたが、そなたが気に病むことではない」

気に病むわけではなく、ただこの現状を見られたり、知られたりしたのだろうか和香子は目を潤ませた。

だが、ガレリウスは香子が恥ずかしがっているなど、露にも思っていない。

ガレリウスはゆっくりと身を起こすと、天蓋のカーテンを開けてベッドサイドのテーブル置かれていた封書を手に取った。

身動きが俣ならない香子は、その仕草をぼんやりと見つめるだけ。

「近日中には、そなたを愛妾として娶るつもりだ。血の契約に則つて庇護することは勿論、そなたを傍に置く」

「ガレリウスさま……」

「嫌か？」

「そうではありませぬ。でも……わたくしで、宜しいのですか？」

愛妾という形でなくとも、客のままでも、邸宅の下仕えでも、ガレリウスの傍に居られるのであれば形は問わない。

問答をしたときに、ガレリウスから簡単には愛妾にすることが出来ないと言われ、気持ち確かめられただけで満足したものだ。

扇を贈ってくれた名も知らぬ公達のように、ガレリウスがただ傍に居て自分を見てくれているだけで、心細さはなくなるのではない

かと感じていた。

ガレリウドは香子よりもずっと長生きで、愛妾にと言われてもガレリウドにとっては、ほんの一時程しか生きることのない娘を娶るよりも、もっと相応しい魔族の娘が居るに違いない。

あの、勝気なエンディリシカも、戦好きなガレリウドにとっては良き相手だと思えるし、何故愛妾止まりで妻ではないのかと不思議に思っているが、その問いを今かけることは無粋だろうと口を噤む。

「香子が良いのだ」

ガレリウドにはつきりと告げられると、香子は恥じらって身体にかかっていたシーツを引き上げて顔を隠した。

その様子に忍び笑いをしたガレリウドの声が聞こえ、香子はもぞもぞと身を丸くした。

封書を手にしたままのガレリウドは、中身を見ながら、香子に向けていた穏やかな顔が一変して険しくなる。

侯爵からの手紙で、出征の要請だった。

妃を娶るまで戦に出さないと豪語していたが、数週間のうちに香子を邸内に囲ったことが伝わったのか、それとも余程切迫した事情があるのか、用件だけしか書かれていない。

シーツに包まって、まるでミノムシのようになっている香子に視線を向けると、封書をテーブルに戻してシーツを引き剥がした。

出征すれば数週間は戻ってこれないだろう。

香子が寂しがってしまったようにというより、ガレリウド自身が香子の温もりを忘れてしまわないように抱きとめた。

庭園を眺めることの出来る邸内の一室は、扉を開ければ平安御所の一室そのものであった。

三十畳程あるはずの一室は、御簾と几帳で細かく六畳ずつに区切られ、ガレリウドは何故にここまで細かく区切るものかと首を捻った。

御簾越しでは顔を正確に見ることは出来ず、美しく鮮やかな着物の色も遠くからは完全に色あせて見えてしまう。

香子の部屋の調度品は全て異世界のものと同じ仕立てにさせ、不自由のないようにと努めたが、ここまで初めてみるものばかりとなると、ガレリウドの邸内であるのにここだけ本当に異世界のようにだった。

香子を愛妾にすると告げてから、翌日に調度品が揃ったために客間から、こちらの広い一室に居を移させた。

イグネルフは邸内ではなく、戦から遠く離れた地に住まいを建てれば良いと言ったが、魔族が住む世界に人間の二人だけを置いて放り出すなどはとガレリウドよりも、琴式部の方がイグネルフに食ってかかった。

人という存在は蔑まれ、香子が領主の愛妾であるとしても、周囲の目はやはり卑下に見られるどころか、伯爵という立場からガレリウド自ら愛妾とした香子を利用する輩が居るのではないかという危険もある。

それを思うと邸内に留め置いていた方が安全は確保される。

香子を利用して伯爵という地位が揺らぐほどのことはないが、ガレリウドの怒りの矛先が向けば、領土内で内乱となってしまう。

そのようなことが侯爵に知れば、笑われるに違いないが、勢力争いというのは人が思っている以上に魔族の争いは激しい。

どちらかが滅ぶまで続けられるのだから。

殲滅將軍と言われるガレリウドに楯突く輩は少ないとはいえ、戦は個人ではなく軍勢として多くの者が関わる。

愛妾がらみの無用な内乱をするなど、あつてはならないこと。

最も、ガレリウドの危惧は愛妾同士での妬み合いを心配している。エンデイリシカのようにあつさり引く愛妾も居れば、嫉妬深い愛妾も居るのだ。

「ここまで変わると、……私の邸内とは思えぬな」

苦笑交じりにガレリウドは御簾の中に入って香子へと声をかけた。本来は、御簾越しに話さねばならないと言うが、愛妾に迎えた以上は御簾はあつてないようなもの。

だが、イグネルフなどの文官が訪れる場合には御簾越しで、と琴式部に言い含められている。

「申し訳ありません……式部が拘ってしまったようで、わたくしは客間のままで良かったのですが」

「何を言うか。そなたを愛妾にしたからには、客間には置けぬ。ああ、調度品のことには気にしなくても良い。物珍しい品に職人たちも作る楽しみがあるようだ。それに我も眺めるだけで心が和む」

他の魔族が居れば、ガレリウドの言葉に耳を疑っただろう。

何よりも戦好きな者が、「心が和む」と言ったのだ。

だが、香子はほんの少し気を良くしたように微笑んだのみ。

「部屋を移して早々ではあるが。侯爵閣下より、出征命令が出た故、明日には軍を率いて邸宅を発つことになった。邸の留守中は全てイグネルフに任せておく。そなたは どうしたい？」

「どう……とは？」

「ついてくるか、邸で待つか。邸で待つなら、血の契約の渴望期が

わからぬので我の血を置いていくつもりだ」

血を飲むというのは好かないと香子が言っていたが、戦場に行く間は血液以外の体液を置くというのは難しい。

凝固させてタブレットのようにさせてしまえば飲みやすいのであるが、一日二日で作れるようなものではない。

吸血鬼の類の魔族がタブレットを使用しているが、あれは一粒で必要な血液を一週間は補充するような特殊なもので、美味しくないからワインと一緒に飲むのだとか、愛妾の一人でもある吸血鬼の娘が言っていた。

「戦場に……ついて行っても、わたくしなど、お邪魔になります」

「当然そなたを戦兵としては扱わぬ。ただ、私の陣幕で戦が終わるまで待つことにはなるが」

ガレリウドは戦に関して負け知らずである。

今回の戦も、ガレリウドの領土から一週間ほど兵を進めた所が戦場のため、侯爵閣下が遣わした。

戦には出さないと豪語していたが、暫く平定していた地であったから、この近辺で戦にはならないだろうと踏んでいたからだ。

だが、いつの時でも例外はある。

「そう心配しなくとも、戦はすぐに終息する。邸に居ても、ついてきても、そなたの安全は保障しよう。そなたが決めるのだ」

ガレリウドに決定権を委ねられたなら、当然ながら香子を戦場に連れていく。

邸に留め置いていたら、心休まる時間がないどころか、侯爵閣下に提示された三ヶ月の猶予期間がもつたいない。

香子は困ったように首を傾げて悩んだ。

邸に居ることを決めれば飲みたくない血を飲まねばならないし、戦場にまで連れられれば血を飲むことはない代わりにガレリウドの邪魔にはなってしまう。

それなら血を飲む方が良いのか、いやいや血を飲むためにはガレリウドの血を採取することになるのだから、それもまた申し訳ない。そもそも、殿方というのは女子は邪魔だとして政に利用はしても、戦いなどは連れない。

連れるというガレリウドは一体何を考えているのか、香子には理解出来ないものだ。

あまりにも悩んでしまった顔がいじらしく見え、ガレリウドは香子が決断するまで待とうとしていたが、思わず腕の中に抱きとめてしまった。

「っ……ガレリウドさま」

「すまぬ。つい……困っている顔をしていると、思い出されるのだ」

香子に初めて会ったときのこと。

困って、泣き出してしまわないかと、女一人に戦の権化と呼ばれた己が振り回されている。

そう自覚していながら、ガレリウドは自分の心を隠すことはしない。

腕の中で見上げてくる香子の頬を撫で、長い髪を梳いた。

「決めました」

「そうか。……では、改めて聞こう。邸に残るか、それとも我の傍を離れず寄り添うか」

その言葉だけで香子を縛り付けているようなものだ。

魔族の相手を支配したいという根底にある性質が、大切にしたいと思える愛妾にさえ向けられる。

ガレリウドを見上げたまま、香子はそつと言葉を添えた。

「わたくしを、連れてくださいませ」

20・戦場の華

荒れた地を武装した歩兵の足音と、魔獣が走る音が地面を鳴り響かせて砂煙を起こした。

行軍するその中でも、やや大きな箱型の戦車の中に、ガレリウドは指揮官として各隊に指示を飛ばしていた。

その傍らには、戦場とは全く釣り合いそうにない華やかな和装、紅の匂の五つ衣に緋色の唐衣を召した香子が、少しでも戦車の揺れを軽減するべく置いたふつくらしたクッションを詠えた座椅子に、慎ましく鎮座していた。

最も、何もすることがないため退屈ではないかと、指示を飛ばす傍らでガレリウドが話し相手となっていて、揺れに慣れてくると座ったまま眠ってしまったりして、戦で張りつめた緊張を解すような緩和剤となっている。

戦地までは約一週間。

侯爵からは疲弊した兵と入れ替わるような陣形をとって、一気に片を付けるつもりで陣を展開するようにと伝えられた。

いつも先陣切って敵を葬り去るガレリウドは、香子に乗せた戦車をどこに置くか、ほんの少し悩んでいた。

連れて行くと豪語したが、戦況からすると先陣に当たる場に置くと敵の魔術が飛ぶという。

そうなると本陣に当たる場に置く方が安全ではあるが、一人留め置くというのは……本陣で取り仕切る者の許可を得なければならぬ。

取り仕切っている者が誰かまでは聞き及んでいないが、もしもレヴィンのような者であれば本陣に置いておく方が危険そうである。

「……御顔が、険しそうですが」

ぺたつとガレリウドの頬に細い手が伸びてきた。

心配そうな香子の顔、座椅子から降りて、うんと背伸びをしている。

その手を重ね、ガレリウドは背伸びする香子に視線を合わせるようにして、少し屈んだ。

「心配ない。そなたを乗せたこの車を安全な所へ置くための模索をしていた」

「やはりついてこなかった方が、良かったのではないでしょうか」

「何を言う。ついて来なければ、そなたは不味い血を飲むことになるのだぞ」

「不味いなんて……。あ、味のことを、嫌っているわけでは……。なく……」

言葉に詰まり、困ったような香子の顔。

血を嫌うとはいえ、戦場に来ても負傷した兵の血を見ることもあるうちに、とまでの意地悪は言わないことにして、長い髪を梳いた。

「戦場は既に開戦している。加勢として布陣する故に、危険はあるが……この戦車は所謂魔法具の一種であるからな。今は車輪を用いて魔獣に引かせてはいるが、その気になれば土の中や水の中を潜ることも出来る」

「まあ……。土や水の中に？ 土の中だと真つ暗になってしまいそうですね」

窓は中が見えないようにとカーテンを閉めているから、土の中に入ったとしても、この状態と大して変わり映えはしないのだが。

そう思ってから、ガレリウドは香子はもしかして魔獣ごと土に潜るでも考えているのだろうかと疑った。

発想豊かというか、この気質は何とも言えない。

「土の中には行かぬよ。私の傍に置くと申したであろう。万全の守りを施した上で連れるつもりだ」

そう言つてガレリウドは何事か命じる言葉を紡ぐ。

魔術を駆使するための言葉、香子には聞き取れず、何を言っているのかはわからない。

だが、淡く青い光や橙の光が香子を取り巻いて、薄い膜状のものを張ると同時に薄く見えなくなった。

何をされたのか、さっぱりわからない香子は首を傾げて、ガレリウドを見つめる。

説明を求めるような顔を向けられ、ガレリウドは再び香子の髪を梳いてから、大きく揺れて傾く身を支えた。

「守護の魔術だ。血の契約だけでは守れない物理的衝撃も、魔法による干渉も守護する。無論、魔術とて万能ではないから効果は時間と共に薄れるが、我がかける魔術だ。そう簡単には破れるものではない」

殲滅將軍と恐れられるガレリウドは、ただ単に戦に突撃する魔將軍ではない。

必要とあらば魔術をも駆使する。

というより、こつした守護の魔術であったり、己の能力を高めるための魔術を得意としている。

支援の術は直接攻撃する魔術と違って地味なものだが、自己能力の高いガレリウドには攻撃魔術がなくとも己の体軀だけで切り抜けることができる。

一応、攻撃魔術を使う敵を知るためにも、魔術自体は知ってはいるが使うことは皆無であった。

「難しいことはわかりませんが……。ガレリウドさまが仰るなら、信じます」

魔術の詳しい話しをしたところで、香子にはまだ読み取ることは出来ない。

それでも不可思議なものに驚いたりしないために、噛み砕いた説明が省ける方が今は助かる。

戦が終われば、いずれ魔術の話をしてもしれない。

「伯爵閣下。侯爵閣下が」

不意に、行軍する戦車の車輪が緩やかになり、停止した。

そしてかけられた配下の魔将による声は、いつもよりも畏まっている。

空気そのものが張りつめたように、歩を進めていた歩兵や、魔獣の鳴き声すらもしんと静まりかえる。

「ああ、いちいち報告などせんでも良いわい。さっさと兵を進めよ」

年寄扱いするなどでも言うような頑固な声。

ガレリウドすらも、先ほどまで難しい顔をしたり、香子に優しく向けていた表情すら凍る。

外気を含ませて戦車のハッチが開き、姿を現したのはガレヴァー
ン侯爵閣下だった。

侯爵閣下が戦車に乗り込むと同時に、また兵が進み魔獣の足も進んだ。

「行軍ご苦労じゃな、ガレリウド。して、そちが新しく娶った
というのは、この娘か？」

侯爵が顎をしゃくる先は、当然とばかりに香子に向いている。刺された香子は檜扇で横顔を隠して、ガレリウドの後ろに隠れようとしている。

いくら体躯のあるガレリウドと言えど、香子の身は隠せても華やかに膨らんだ衣装は隠せず、侯爵にはバレバレである。

ガレリウドは一つ嘆息しながら、侯爵に椅子を譲った。

一体、どこから情報が伝わったものなのやら、この地獄耳の侯爵には敵わないと肩を竦めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3057y/>

黒伯爵の妃

2012年1月6日06時48分発行